

茶の呈味の客観評価とその発現に関する研究

A Study on the Evaluation of the Taste of Tea Using a Taste Sensing System

内山 裕美子

Yumiko Uchiyama

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：茶，味認識装置，うま味，カルシウム，アルギニン

Key words : tea, taste sensing system, *umami*, calcium, arginine

1. 研究目的

茶の滋味は，うま味，渋味，苦味などから構成され，これは茶の品種や栽培条件，製造条件によっても左右される．使用する茶葉の分量，形状，湯量とその温度，蒸らし時間と水の種類などがうまくバランスされた時に，それは「美味しい茶」ということになる．

近年，都甲らによって味認識装置（以下，味覚センサーと呼称）が開発され，各種飲料の客観評価が行われるようになった．

本装置は，人工脂質膜と味物質とが接触することにより生じる，電位差を測定するものである．味物質には電荷を有するものと有しないものが存在し，脂質膜との相互作用は，イオン結合やイオンによる遮蔽効果であったり，また，イオン結合と疎水結合の両方が関与したりする．近年はこれら膜の選択性・機能が飛躍的に向上してきた．

本研究では，茶の滋味の変化を官能評価で評価するとともに，味覚センサーを用いて測定し，データベース化を試みた．このデータベースを駆動することにより，茶系飲料の嗜好性の特徴をグルーピング化する．さらに，茶の味を構成する成分（単相系）と，茶そのもの（複合系）での滋味を比較し，味の可視化を検討するとともに，美味しい茶発現の機構を明らかにすることを目的として実験を行った．

本研究の概要としては，茶の製造工程による味の評価と製造方法の違いにより，異なる茶種の呈味の可視化および，前途の期待されるバングラデシュ紅茶の水色，香り，呈味の測定を行うとともに，水色とテアフラビンおよびカテキン含有量の関係について検討した．また，茶の淹れ方，水の硬度による呈味の変化について実験を行い，カルシウム（Ca）の動態について検討した．美味しい茶発現の機構を明らかにするため，うま味に着

目し，茶に含まれる化学成分が，うま味に与える影響について実験した．これらの結果から，うま味受容体であるT1R1/T1R3との相互作用を検討し，茶のうま味の発現機構を明らかにすることを試みた．

2. 研究方法，内容など

- ①試料用茶葉3gに熱湯200mlを加えて，3分間浸出後，濾別した浸出液を試料液とした．
- ②この浸出条件を基本として，茶葉の種類，量，浸出時間，浸出液量とその温度，浸出に用いた水の種類と硬度，うま味に影響すると考えられるテアニン，MSG，Arg，クエン酸などの茶成分の添加量を変動させたものも，試料液とした．
- ③得られた試料液を，（株）インテリジェントセンサーテクノロジー社製味覚センサー（SA402B）で測定すると共に，官能評価を行った．
- ④試料液中のカテキン，アミノ酸などの化学分析，水色，香気成分の分析を行った．茶葉中の¹Hと²Hおよび¹⁴Nと¹⁵Nの同位体構成比を求めることによりトレーサビリティを，また，茶葉に中性子線を照射することに伴って発生する即発γ線を測定することにより，茶葉中ミネラル成分の定量を行い，データベースを構築した．
- ⑤うま味受容体であるT1Rファミリーのうち，T1R1/T1R3ヘテロダイマーをエッペンドルフチューブのふたを用いて，舌辺縁の葉状乳頭を数回擦過し，採取した．これを試料として受容体遺伝子を得，うま味とうま味関連物質の親和性を電気泳動により検討した．

3. 研究の結果，目的の達成状況など

- (1) 品種による呈味の特徴とデータベースについて
- ①紅茶をはじめとする茶の製造工程や，緑茶，紅茶，烏龍茶など，各種茶の種類を味覚センサーで測定することにより，発酵の程度による茶種

の分類が可能であることを示す結果が得られた。データベースを駆動することにより、これらの分類された茶のうま味について検討した。

(2) バングラデシュ紅茶の水色、呈味、香り

- ① バングラデシュ紅茶は、水色に特徴があることが示され、各試料のテアフラビン含有量は、水色に対応することが示された。また、Keemun紅茶よりも明るい赤橙色を示すことが認められた。
- ② 香气について他の茶類と比較すると、香气成分含有量そのもの、および上級紅茶に存在する特徴的フレーバー成分であるLinaloolやcis-Linalool oxideなどの含有量は低い値として示された。バングラデシュの特徴的フレーバーは、Benzaldehyde, 2-Hexenal, 2,4-Decadienal, 2-Phenylethyl alcoholを比較的多く含み、その和として穏やかな香りを示すものであった。
- ③ 等級区分別による呈味の変化では、粒子が細くなるにつれて、うま味強度および渋味強度がともに強くなることが示されたが、約0.5mmからは、うま味強度はなだらかに弱まり、渋味強度は緩やかに強まる傾向として示された。これは、粒子が細くなるにつれて、3g中に含まれる粒子の数が多くなり、熱湯を淹れることでカテキンが溶出しやすく、渋味強度が強まったのではないかと考えている。

(3) 茶の淹れ方の違いによる呈味の変化

- ① 煎じ回数を経るごとにアミノ酸、カテキン含有量は減少し、味覚センサーデータにおいても弱まることを示された。
- ② 浸出時間の違いでは、うま味強度、渋味強度とも1分程度まで強まることを認められたが、以後、渋味強度はなだらかに、うま味強度は2分まで強く示された。茶の味の一般的な美味しさが、浸出時間“2分”ほどと、よく言われており、訓練されたパネル3名による合議制で本試料液についての嗜好性を検討した場合にも、浸出時間2分の場合が最も好まれる結果であった。
- ③ 茶葉量の違いによる呈味では、うま味強度については、用いた茶葉量と比例的に強まり、渋味強度については茶葉量が2gまで強まることを認められたが、以降は漸増傾向として示された。茶に含まれるカテキンおよびアミノ酸含有量と同量のEGCG, MSGを用いて測定した結果、対応する茶葉量の測定値よりも非常に低い値として示された。
- ④ 茶を冷水で浸出した場合に比較し、ぬるま湯で浸出した場合においては、味覚センサーによる

味強度では、うま味強度は弱まり、渋味強度としてはやや強まることを示された。しかし、同一茶葉を用いて冷水、ぬるま湯、熱湯と順次茶を浸出すると、ぬるま湯で浸出した場合、冷水で浸出した場合に比べ渋味強度は非常に強くなり、反対にうま味強度は弱まることとして示された。

(4) 水質の違いによる呈味の変化

- ① ミネラルウォーターそのものの測定値では、福島県「矢祭の水」のうま味強度が最も強く示され、反対に「蒸留水」は最もうま味強度が弱い値として示された。
- ② 水の種類を変えて茶を浸出した場合、「evian」水を用いた時に、最もうま味強度の強いことが示された。しかし、さらに硬度の高い「Contrex」では、うま味強度に寄与していることは認められなかった。
- ③ 「evian」水の硬度などを参考に、CaCO₂を用いて濃度勾配溶液を調製して、味覚センサーで測定したところ、うま味強度におけるCa²⁺の濃度依存性は全く認められず、むしろ負の濃度依存性として示された。うま味強度におけるCaの役割は大きく、CaCO₃と組み合わせることにより、人工硬水を作成することが可能であった。さらに、味覚センサーと官能評価においても、この人工硬水で、「evian」水と同程度のうま味強度を持つ茶を浸出することが可能であった。

(5) 茶のうま味発現について

- ① 茶のうま味モデルに及ぼす各成分の影響を味覚センサーで測定したところ、基準としたうま味モデルに比べて、ArgおよびCANaを除去した際に最もうま味強度が減少することが示唆された。
- ② 「evian」水を用いて作成したうま味モデル試料液では、蒸留水を用いて調製した試料液よりもうま味強度が強く示された。また、官能評価においても、同様の結果として示された。「evian」水を用いた方がうま味強度が強まるのは、水に含まれているミネラル成分、特にCaのイオン強度が影響しているものと考えられた。

(6) 同位体比による呈味への影響

- ① 同位体比を測定することにより、山間部茶園の茶は平野部に比べるとうま味、渋味強度が強く、²Hよりも¹Hの方が多く分布していることが示された。

人体構造の特徴を考慮した人体モデルによるバレエ教材

Ballet Instructional Materials Based on Anatomical Model with
Regard to Particular Characteristics of the Human Body

野田 幸恵

Sachie Noda

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 情報コミュニケーション専修

キーワード：バレエ，教材，人体モデル，骨格モデル

Key words : ballet, hypermedia instructional materials, human anatomy model, skeletal model

1. 研究目的

バレエは音楽伴奏・舞台芸術を伴いダンスによって表現する舞台上、言葉を使わず全身で心を表現していく芸術であることから、クラシックバレエの習得において所作の基礎レッスンはとても大切である。身体が間違った動きを覚えこまないように、どのような訓練をどういう順序でいかに行うか、年齢に応じた正確なレッスンが不可欠である。卒業研究では、5歳からバレエを続けてきた経験を元に、バレエの踊りの3次元シミュレーションをテーマとした。

これに引き続き、本研究では、バレエの初心者から経験者まで、また子どもから成人までの受講者に対して、バレエの基本を理解する一つのツールとして、バレエの専門書の基本レッスン部分を対象にバレリーナの骨格の構造と動きを分かりやすく示した教材を作成することを目的とした。

2. 研究方法，内容など

バレエの動作を行う際の人体の構造を、解剖学をもとに考察し、3D-CGソフトウェア上でバレリーナの人体各部位をポリゴンモデルとして作成した。次に、この人体モデルにBone（関節構造をもつ骨格モデル）を合成したモデルを作成して関節部分を中心とした動作を与え、バレエの基本であるバレレッスンを動画で再現してホームページ形式の教材を作成した。

教材に使用したバレエの基本レッスンは、

- 1)クラシックバレエのすべての動きの中に取り入れられている【プリエ】
- 2)つま先で床に円を描きながら脚を動かす【ロ

ン・ド・ジャンプ・アテール】
3) ゆっくりとした動き【アダージオ】
の3つである。

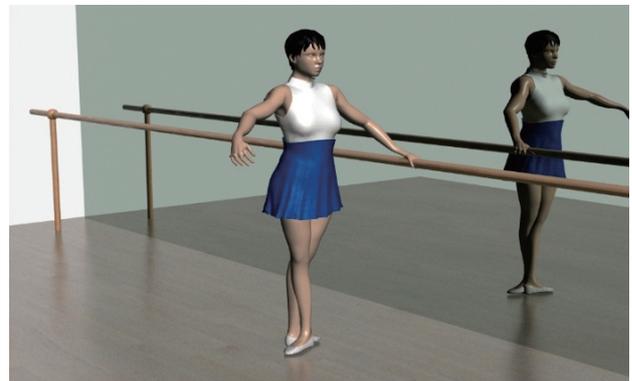


図1 人体モデル

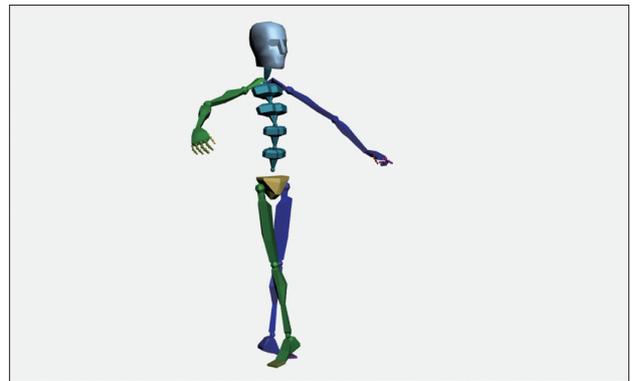


図2 Bone（骨格モデル）

3. 研究の結果，目的の達成状況など

1) 人体

人体を表現する際に、解剖学に基づいた構造を付与するため、一つにはポリゴンモデルを用いて筋肉等による体表の詳細な凹凸を表現した。

また一つにはポリゴンモデルの正しい関節の位置にBone（骨格モデル）を配置することにより、動作がよりリアルに見えるように工夫した。完成したモデルは、人体の特徴をよく表現した仮想人体といえよう。しかし、Boneにスキンを組み合わせて、人体各部位の個々のBoneの動作がポリゴンモデルに影響を与える範囲を設定することは非常に難しく、今回は、動作確認の済んでいるAutodesk社のチュートリアル用モデルを使用して、動作アニメーションを作成した。

人体モデルは、バレリーナとして教材上で使用するため、まず、布地設定により作成した上下衣服をそれぞれシミュレーションにより人体モデルに着せた（図1）。このとき、衣服は人体と干渉計算を行って、自然な着用感を出している。

2) 動作設定

動作設定（バーレッスン）においては、動作開始時点より、動作終了時点まで、自己の経験に基づく動きのフローに合わせて人体各部位の個々のBoneに移動・回転の変形を与えて動作を設定していった（図2）。自己の長いバレエ経験があったからこそ、教材としての使用に耐えうる動作設定ができたと考えてよいだろう。

3) 教材

教材作成に当たっては、見ながら真似してみることが出来る人体モデルによる基本レッスンの動画、および人体と同じ動作を行う骨格モデルの動画に加えて、バレエの歴史と基本動作に関する解剖学的な説明を加えて、初心者でも学習できるようにホームページを作成した（図3）。

ホームページ形式の教材は、今後、インターネットを介して配信することも可能である。

4. まとめと今後の課題

バレエの基本を理解する一つのツールとして、バレエの専門書の基本レッスン部分を対象にバレリーナの骨格の構造と動きを分かりやすく示した教材を作成した。三次元CGを用いて動作アニメーションを行った結果、バレエのバーレッスンに関して良好な動作設定を人体モデルに付与することができた。また、これらの動画をホームページ形式の教材に掲載したことで、やわらかい配色や探

しやすいメニュー構造と共に、簡単に使えるバレエ教材が作成できた。

今後、このバレエ教材を使用して学習してもらえようようにしていきたい。そして、バレエにもっと興味を持ってもらえるように期待したい。その一方で、バレエの基本における体の使い方など、さらに分析してよりよいモデルを作成することも必要であると考えられる。



図3 プリエの動画ページ

主要参考文献（著書、学術雑誌）

- [1] 邦正美「舞踊の文化史」、東京：岩波書店、1968
- [2] 佐々木涼子「バレエの歴史：宮廷バレエから20世紀まで」、東京：学習研究社、2008
- [3] ヴァレリー・グリーグ「インサイド・バレエテクニック」、大修館書店、2009
- [4] セリア・スパージャー「やさしいダンスの解剖学」、大修館書店、2001
- [5] 「クララのバレエ・レッスン」、新書館、2001
- [6] 足のポジションーフィットネスの勧めーサイト
<http://www.i-l-fitness-jp.com/ballet/position-of-the-feet.html>
- [7] 岸田明子「ダンス・コンディショニング 感じてとらえる からだの仕組みと使い方」、東京印書館、2009
- [8] Autodesk社のサイト
<http://www.autodesk.co.jp/adsk/servlet/home?siteID=1169823&id=3551938>

箱庭で展開されるごっこ遊びの意味について — 保育園での実践を通して —

Meaning of Symbolic Play Developed in Sand-Play:
A Practice at a Nursery School

井出 米

Mai Ide

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：箱庭，想像力，ごっこ遊び，子ども，保育園

Key words : sand-play, symbolic play, nursery schools

1. 問題と目的

一般的に、子どもは遊ぶことを通じて様々なことを学び成長していく。日常場面においても心理臨床場面においても、遊びを通じた想像力の発達が、精神発達や自己治癒力の育みに重要であるといわれている。そして、想像力が活用されるごっこ遊びが注目されている(明神, 2005)。玉置(1988)は5歳児以降になると現実場面から飛躍した創造的なごっこ遊びを展開すると述べている。

心理臨床場面では、遊びは遊戯療法として導入されている。東山(2005)は遊戯療法の諸説と自らの体験から、遊戯療法の仮説を「子どもに自由に遊べる場と理解してくれる大人を与えると、子どもの自然治癒力が働き、子どもは生き生きしてくる。もし、周囲の大人がどこまでもこのような態度を取り続けるならば、子どもは充分遊び演じつくすことができ、心の問題は昇華される」としている。

遊戯療法の中でも、自己治癒力を最大限に利用するものとして箱庭がある、というドラ・M・カルフ(1904-1990)の考えを河合(1969)は紹介している。箱庭とは水色に塗られた箱(57×72×7cm)の中に砂が入ったものであり、その中にミニチュアを入れて使用するものである。箱庭には「表現のしやすさ」枠による「守り」「砂の感触」「可逆性」などの要素を含んでおり、河合(1969)は、箱庭は製作者とセラピストの関係が成立した上で行うと、意識と無意識が交錯する領域に生じたものの表現を促進する作用があり、それらの表現が可能となると自己治癒に繋がると述べている。近年、箱庭を保育園や小学校へ導入する試みが報告されつつある。子ども達は箱庭の中で作品を作るというより、遊ぶことが多いと言われるが、箱庭で展開される遊びや、箱庭の集団での実施につい

てあまり検討されていない。そこで、本研究では箱庭を日常場面に導入し、箱庭の集団実施を通じて日常場面における箱庭遊びの意味について観察研究を行う。そして、日常場面への箱庭の導入可能性について論考していく。

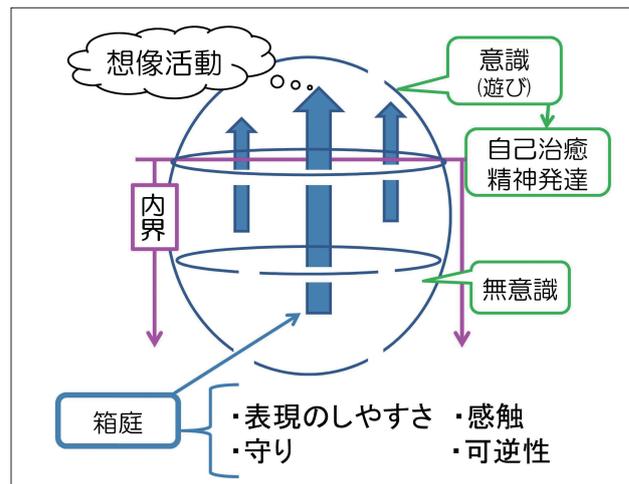


図1 箱庭が想像活動と精神発達・自己治癒力に与える影響について

2. 方法

保育園へ箱庭道具一式を導入し、保育活動の一環として箱庭遊びの時間を約40分設けた。対象児は5, 6歳児であり、2, 3名ずつ箱庭を実施した。箱庭の内界の表現をしすぎるという危険性(木村, 2002)を考慮し、箱庭の知識を持ち、1年間の実習を通して子ども達と知り合う時間を持った筆者が必ず立ち会った。また、院生1名も同席し、ビデオにて撮影をした。立ち会う際には、子ども達に積極的な介入は行わず、基本的には子どもが話しかけてきたことに答えるという姿勢を取った。

3. 観察から得られた気づき

観察で見られた特徴的な行動について、①子ども達が箱庭に接するまで②箱庭空間の使い方③個人の箱庭と遊び④大人とのかかわりの4点を軸に考察していく。

①子ども達が箱庭に接するまで

箱庭は子ども達にとって、異様で近寄りたいたいが、気になるものである様子が観察された。また箱庭空間に入ると、まずミニチュアの探索から始まり、箱庭に一度触れると、床と箱庭を往復しながら箱庭の中を探索の様子が見られた。子どもたちは日常的に親しんでいる床やミニチュアを使用し、自発的に箱庭に少しずつ近づいていくことが観察された。

②箱庭空間の使い方

箱庭の探索活動がひと段落すると、子ども達は箱庭空間を、「箱庭の世界」と「床の世界」と2つの世界に分けて使用していく。これは、箱庭の枠が持つ一つの世界に創りあがらせようとする力(仁里, 2002)が働いているためであると思われる。また、箱庭の世界で遊び始めた子どもは床と箱庭を往復するが、床で遊び始めた子どもは箱庭の中に中々入れない様子が見られた。箱庭の中が外界と内界の中間領域を表しており(長岡, 2007)、そのことが子どもが箱庭の中に中々入れない様子に繋がると考えられる。

また、箱庭を複数で使用する場合には、箱庭をミニチュアで分断したり、時間差をつけて使用したりと、子ども同士お互いに妥協や譲り合いをしながら箱庭で遊ぼうとする様子が観察された。箱庭は個人の内界を表現しすぎるという危険がある(木村, 2002)と言われている。しかし、子ども達は互いにストッパーになりながら箱庭を展開するため、内界を表現しすぎてしまうということは考えにくいと思われる。

③個人の箱庭遊び

子ども達は変則的な環境にもかかわらず自分のペースで、ある一貫性を持ちながら遊びを展開する様子が観察された。また、箱庭空間の中では日常場面の模倣とは異なるごっこ遊びが展開され、箱庭のある空間が現実と異なる空間であることを子ども達は感じとっている様子も見られた。箱庭の中では砂に埋める・掘り起こすといったテーマがよくみられた。隠す・見つけるという遊びは自分自身を確かめる遊び(弘中, 2002)として知られており、子ども達は、母性に繋がる砂(河合,

1969)を利用して自分自身を確かめていたと思われる。

④大人とのかかわり

箱庭を行う上で、その場に同席する大人との関わりは考えなければならない。本研究に同席した筆者は、子ども達から話しかけられたことに対して応答はするが、箱庭の使い方などについては極力説明を避けた関わりをした。しかし、子ども達は筆者に積極的に質問をすることなく、子ども自身で箱庭の使い方を考え試していた。これは、子どもたちが箱庭を前にしてやりたいことが惹き立てられていたためであると考えられる。

また、箱庭の中で遊びが展開すると、同席していた筆者も様々な感情を抱いた。箱庭空間では遊びを行う子どもだけではなく、同席する大人にも様々な感情を起こさせると思われる。

4. まとめと今後の課題

日常場面において子ども達にとって箱庭がある空間は現実世界とは異なることを感じていると思われる。しかし、箱庭に対して拒否的な態度を示すことはなく、床と箱庭を往復しながら箱庭の探索を行い、様々な工夫を行って遊びを展開することが明らかとなった。そして、子ども達が様々な工夫を行うことで、内界世界の表出しすぎることや急激な展開が生じる危険が少ないことも示唆された。本研究から、子どもにとって箱庭は、日常場面においても心理臨床場面の要素を含んだ表現の場の一つになりうることを示唆された。

日常場面に導入することについて鈴木(2001)は、少し特別な空間が重要であると述べている。そして、本研究においても日常場面と少し異なる状況が必要である可能性が示唆された。そのひとつとして、同席する大人との関係は重要であると考えられ、今後検討する必要があると思われる。

主要参考文献(著書, 学術雑誌)

- [1]Dora. M. Kalf. (1996). *Sandspiel*. Munchen : Ernst Reinhardt Verlag. (ドラ・M・カルフ(2001). 山中康裕(監訳) カルフ箱庭療法【新版】 誠信書房.)
- [2]河合隼雄(編)(1969). 箱庭療法入門 誠信書房.
- [3]Susanna Millar. (1968). *The Psychology Of Play*. England : The Penguin. (スザンナ・ミラー(1981). 遊びの心理学——子供の遊びと発達 森 重敏・森 楸(監訳) 家政教育社 pp.231-247.)

大麦β-グルカンの耐糖能改善メカニズムに関する研究

Studies on Barley β-glucan in Relation to Its Mechanism of Improving Glucose Tolerance in mice

鈴木 祥菜

Sachina Suzuki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：大麦，β-グルカン，耐糖能改善，GLP-1，炎症

Key words : barley, β-glucan, glucose tolerance, GLP-1, inflammation

1. 研究目的

近年、栄養過剰や運動不足などの生活習慣が大きく変化したことによって、メタボリックシンドローム（以下MSと略す）の発症が急激に増加している。MSを予防するための食事はまだ確立されていないが、食物繊維の多い食事はMSにおける代謝異常に対して効果的な役割を果たすとみなされ、食物繊維摂取源として穀類、野菜類などを多く摂取することが推奨されている。中でも大麦は日本において古くから食べられてきた穀物の1つであり、毎日摂取する主食の米や小麦と一緒に摂取可能な食品である。これまでに、大麦の血中コレステロール濃度低下作用に関する研究が行われてきたが、大麦のβ-グルカン含有量や品種、搗精率に着目したMS改善作用に関する研究例は少ない。本研究では、MSの主要因であるインスリン抵抗性と脂肪組織の初期炎症に及ぼす大麦の作用について着目した。そこで、マウスを用いて大麦中のβ-グルカン量、モチ種やウルチ種などの大麦の品種、搗精率の違いによる作用を比較することによりメカニズムの一端を解明することを試みた。特に、インクレチン分泌や抗炎症作用に及ぼす影響を調べるために各種マーカーを選定して検討を行った。

2. 研究方法

<動物実験>

実験1

- ・大麦中のβ-グルカン量の影響を検討する
- ・食餌性肥満モデルマウスを12週間（長期）飼育

実験2

- ・品種の違いがインクレチン分泌に及ぼす影響を検討する

実験3

- ・大麦中のβ-グルカン量が初期炎症に及ぼす影

響を検討する

- ・遺伝性2型糖尿病モデルマウスを4週間（短期）飼育

実験4

- ・大麦中のβ-グルカン量が初期炎症に及ぼす影響を検討する
- ・食餌性肥満モデルマウスを7週間（短期）飼育

実験1, 2では耐糖能改善作用とインクレチン分泌の影響について、実験3, 4では耐糖能改善作用が初期炎症の抑制による可能性について調べた。

<実験1>

実験動物は、通常では肥満を呈さないが高脂肪食摂取で肥満を呈する5週齢のC57BL/6J雄性マウスを1群8匹の3群に群分けした。実験飼料は、AIN-93G組成飼料を基本とし、脂肪エネルギー比が50%となるようにラードを添加し、対照（CO）群の飼料とした。大麦群の飼料は国産の高β-グルカン大麦（ウルチ種、β-グルカン量10.1%、ビューファイバー；BF）を総食物繊維量として5.0%になるように添加し、β-グルカンを含まない大麦（ウルチ種、β-グルカン量0%、グルカンレス；GL）はBFと同量添加し、セルロースで食物繊維量を調整した。各飼料と水は12週間自由摂取させた。

<実験2>

実験動物は、実験1と同様に5週齢のC57BL/6J雄性マウスを1群8匹の4群に群分けした。実験飼料は、CO群の飼料は実験1と同様に調製した。大麦群の飼料はキラリモチ（モチ種、β-グルカン量5.4%；KM）、ファイバースノウ（ウルチ種、β-グルカン量4.0%；FS）、スカイゴールド（ウルチ種、β-グルカン量3.2%；SG）を総食物繊維量として5.0%になるように添加し、不足分はセルロースで調整した。なおKM群、FS群、SG群は

60%搗精粉を用いて、各飼料と水は12週間自由摂取させた。

<実験3>

実験動物は、過食により軽度の2型糖尿病を発症する5週齢のKK/Ta雄性マウスを1群8匹の3群(CO群, BF群, GL群)に群分けした。実験飼料は、実験1と同様に調製し、各飼料と水は4週間自由摂取させた。

<実験4>

実験動物は、実験1と同様に5週齢のC57BL/6J雄性マウスを1群8匹の2群(BF群, GL群)に群分けした(CO群は省略)。実験飼料は実験1と同様に調製し、各飼料と水は7週間自由摂取させた。

実験1~4では、飼育最終週に6時間の絶食後、グルコース溶液をマウスに経口投与し、耐糖能試験を行った。投与前に尾部より経時的に採血し、血糖値を電極法により測定した。マウスは6時間絶食後にエーテル麻酔下で採血し、各臓器を摘出後、重量を測定した。血清脂質は酵素法、ホルモン濃度はELISA法で測定した。副睾丸周辺脂肪組織の炎症マーカーおよび回腸のインクレチンマーカーのmRNA発現量は、リアルタイムPCR法により測定した。門脈血は、DPPIV阻害剤入りのヘパリンコートしたキャピラリーチューブに採血した。門脈血漿GLP-1濃度は活性型GLP-1(7-36)濃度をELISA法にて分析した。盲腸総GLP-1プールサイズは酸性化エタノールで抽出後、盲腸内の総GLP-1濃度をELISA法にて分析した。実験2では、耐糖能試験においてCO群と差のあったKM群において、回腸L細胞数について分析を行った。回腸L細胞数は抗GLP-1抗体を用いて免疫染色を行い、1mm²当たりの細胞数を計測した。

3. 研究の結果

<耐糖能改善作用について>

実験1において、CO群に比較してBF群に耐糖能改善作用が認められたため、 β -グルカンによる耐糖能改善作用が示唆された。一方、 β -グルカンを含まない大麦にもその作用が認められたため、アラビノキシランなどの β -グルカン以外の成分の影響もあることが示唆された。また実験2において、CO群に比較してKM群に耐糖能改善作用が認められ、SG群においても食後15分後の血糖値が有意に低下した。本結果より、モチ種およびウルチ種の大麦の摂取はいずれも耐糖能を改善することが明らかとなった。

<耐糖能改善メカニズム1—インクレチン分泌促進作用—>

実験2のKM群において、門脈血漿活性型GLP-1(7-36)濃度がCO群に比較して有意に高値を示したことから、大麦にはGLP-1分泌促進作用があることが示唆された。また、盲腸総GLP-1プールサイズにおいてもCO群に比較してKM群で有意に高値を示した。さらに、L細胞の機能マーカーであるPGCG, PC1, PPAR β/δ , GPBAR1, GPR43の回腸のmRNA発現量の有意な変化は認められず、またPC2はCO群と比較してKM群において逆に有意に低値を示したことから、L細胞の機能マーカーによるGLP-1分泌の増加は説明できなかった。一方、L細胞の数のマーカーであるNeuroDがCO群に比較して有意に高値を示し、免疫染色においても回腸のL細胞数の増加が認められた。本結果により、大麦を摂取することで、回腸のL細胞の機能変化ではなく、細胞数が増加することによりGLP-1分泌量が増加することで、耐糖能の改善に寄与している可能性があるかと推定した。

<耐糖能改善メカニズム2—脂肪組織の炎症改善—>

実験1, 3, 4の全粒粉であるBF群において脂肪組織の炎症が抑制されることが示唆されたが、実験2の搗精粉であるKM群においては認められなかった。この違いは、外皮に含まれる成分の影響が考えられる。本結果により、 β -グルカンの量や品種、または搗精率によって、脂肪組織の炎症に影響することが示された。実験3の遺伝性2型糖尿病モデルマウスにおいて、CO群に比較してBF群で脂肪組織の炎症抑制が認められたことから、インスリン抵抗性による機能破綻を起こす前段階において、脂肪組織の炎症を抑制することが示された。

4. まとめと今後の課題

モチ種やウルチ種などの品種、搗精率の違いはみられなかったが、 β -グルカンを多く含む品種の大麦を摂取することによって耐糖能の改善効果が強くみられた。また大麦 β -グルカンの摂取により、回腸のL細胞の細胞数が増加し、インスリン分泌を促進するGLP-1の分泌量が増加することが明らかとなった。さらに全粒大麦の摂取は、インスリン抵抗性の誘導因子の1つである脂肪細胞の初期炎症を抑えることが明らかとなった。本結果から、これら2つのメカニズムにより耐糖能を改善するという可能性が示唆された。

今後は、これらの寄与の度合いの検討が必要である。また、外皮に含まれる成分の影響も考えられるため、同じ品種間における全粒粉と搗精粉での比較が必要である。

『テンペスト』研究——キャリバンの表象を中心に

A Study of *The Tempest* with Focus on the Representation of Caliban

小菅 奈保子

Naoko Kosuge

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 英語文学・英語教育専修

キーワード：ロマンス劇，ポスト・コロニアリズム，言語植民地主義，キャリバン，可愛らしさ

Key words : Romances, post-colonialism, linguistic imperialism, Caliban, charm

1. 研究目的

『テンペスト』(*The Tempest*, 1611) はシェイクスピア (W. Shakespeare, 1564-1616) が単独で書いた最後の劇と考えられ、ロマンス劇 (Romances) と呼ばれる一群の劇の中に位置付けられる。この作品で何を意図し、何を意味したかについて、シェイクスピアは他の劇と同じように何も語らずにこの世を去っているが、とくに最晩年の劇ともなると、多くの学者、愛好家の興味をひき、これまで多数の解釈が積み重ねられてきた。ロマンス劇『テンペスト』受容の変遷をたどり、この劇に対するポスト・コロニアリズム (post-colonialism) の干渉を確認し、最後にキャリバンの (Caliban) 台詞の分析を通して、その表象について探求していく。

2. 研究方法, 内容

(1) 研究方法

・ *Shakespeare Survey* (OUP, 1948~) のロマンス劇を特集した11巻 (1958), 29巻 (1976), 43巻 (1990) を基に、『テンペスト』の受容の変化をたどる。

・ エドワード・W・サイド (Edward W. Said, 1935-2003) が提示したポスト・コロニアリズムを理解し、この思想と『テンペスト』との関わりを確認する。

・ 言語伝達に関するスティーブン・J・グリーンブラット (Stephen J. Greenblatt, 1943-) の見解を踏まえながら、言語植民地主義についてテキストの台詞に即してから読み解く。

(2) 研究内容

第一章では、ロマンス劇の解釈と受容の歴史について論じる。ロマンス劇は、作品が上演されてから、とくに19世紀に至るにおよび、ロマン派を

代表する批評家達によって、シェイクスピアが彼の晩年の心境を描いた作品群であると、伝記的に扱えられるようになった。なかでも『テンペスト』においては、主人公であり魔法を行使できるプロスペロー (Prospero) が、最後に魔法を捨て、故国に帰還するという筋を持つため、作者シェイクスピアが20年に及ぶ劇団での執筆活動に別れを告げたことと重ねあわされて享受されてきた。しかし、20世紀に入り、戯曲を植民地主義に関連付けた研究、ポスト・コロニアリズムの思想が出現したことで、ロマンス劇の中では『テンペスト』が、また劇の中心人物は、魔法を操るプロスペローから奴隷として表象されるキャリバンへと焦点をうつしていく。

第二章では、第一章で確認した激変の原動力となったポスト・コロニアリズムというアプローチを再確認する。ポスト・コロニアリズムは、植民地の残酷で悲惨な暴力にさらされてきた人々の視点から西欧近代の歴史を批判的に見直し、現在に及ぶ影響について考察することを主眼とする。20世紀後半、この思想を基に文学的研究を実行する上で、植民地主義と関連付けられたのが『テンペスト』である。現実世界の植民地主義と劇のプロットが同じような流れをたどり、カリブ海諸国やアメリカの作家達は、島を無慈悲に奪い取った植民者をプロスペローとして、また島の支配権を奪われ、強制的に奴隷へと変えられたキャリバンを被植民者として対比的に考えた。とくに、島の先住民・怪物キャリバンは、植民地主義という社会問題の中で軽視されてきた人々を体現する上で欠かせない存在である。ポスト・コロニアリズム批評によってキャリバンの存在が注目され始め、ときに同情の眼で見られるようになったキャリバンは、

絵画の世界でもユニークな描かれ方をするようになる。

第三章では、第二章でみた、ポスト・コロニアリズム批評の中心のひとつが言語論、言語観にあると想定し、これについて論述し『テンペスト』の解釈を試みる。植民地主義において、植民者と被植民者が互いに意思の疎通を図ることは常に重要な位置を占めている。アメリカの文学研究者であるグリーンブラットは『テンペスト』における言語伝達について、言語文化を持つヨーロッパの植民者とヨーロッパの文化を持たない先住民との出会いを、プロスペローとキャリバンの出会いによって表現し、言語植民地主義を風刺しようとした。キャリバンは自由を得るため、また自分自身の意思を伝えるため、たとえそれが悪口であったとしても、プロスペローが話す人間の言葉を習得し、プロスペローの心の乱れを反映する言葉を身につけた。グリーンブラットの著書 *Learning to Curse* は植民者・被植民者の相互関係を如実に表している。しかし、劇が終盤になるにつれて言葉を完全なものにしていくキャリバンは、自身の心に潜んでいた美しさを自らの歌の中で表現している。その歌に込められた思いを知った時、読者は怪物と呼ばれるキャリバンに愛着を持ち始める。

3. 研究の結果

シェイクスピアが『テンペスト』に託した意味を把握するのは困難なことだが、ポスト・コロニアリズムの視点が生まれたことで、キャリバンの存在を見つめなおすことができるようになったのは確たる事実である。古代・中世の思想では人間以下の存在であったキャリバンも、ポスト・コロニアリズムの思想が開花したことで、現代社会において、人間性を象徴する存在となった。

戯曲の中にあるキャリバンの台詞をみると、プロスペローから解放され、自由になりたいという思いが込められたものが多い。また昔を懐古するキャリバンの歌には自由への希求と、共に過ごす存在に対する願望がみられる。これが言葉を習得したキャリバンの本心である。キャリバンは自分自身の思いを表現するために、植民者から習い覚え、あるいは教え込まれた言語を喋り、また言語により「呪う」ことができると知った。その過程はまるで、まだ十分に言葉の恐ろしさを知らない子供が習得したばかりの悪口を話す言語行動を見

ているようだ。わたしたちは、「知恵の悲しみ」を知る一步手前にいる子供とキャリバンを重ね合わせ、そこにキャリバンに対する独特の感興を抱くのである。ときに素朴とも思える「可愛らしさ」というキャリバンの形容辞は、この心象を物語るものであろう。

4. まとめと今後の課題

三章にわたって、シェイクスピアの謎めいた遺作『テンペスト』と、奇形な姿の奴隷キャリバンの受容の変遷をたどってきた。作品に対する概念が、それぞれの時代に生きた人々が持つ思想によって変化していく様子は大変に興味深い。キャリバンの台詞のさらなる分析を続け、言語植民地主義をめぐる言説をより深く考察することで、キャリバンの表象の意味と『テンペスト』の解釈を、より深化させていきたい。

主要参考文献（著書、学術雑誌）

Primary Sources

- [1] William Shakespeare, *The Tempest*, New York: Cambridge University Press, 2002
- [2] ウィリアム・シェイクスピア, 大場建治訳『あらし』, 東京: 研究社, 2009.

Secondary Sources

- [1] Edwards, Philip, "Shakespeare's Romances: 1900-1957," *Shakespeare Survey*, Vol. 11, Oxford University Press, 1958.
- [2] Greenblatt, Stephen, *Learning to Curse*, New York: Routledge, 1992.
- [3] Tillyard, E. M. W., *Shakespeare's Last Plays*, London: Chatto and Windus, 1938.
- [4] ヴォーン, アルデン・T., ヴァージニア・メーソン・ヴォーン著, 本橋哲也訳『キャリバンの文化史』, 東京: 青土社, 1999.
- [5] 本橋哲也 著『ポストコロニアリズム』, 東京: 岩波新書, 2005.

現代青年のバウムテストにおける基礎的研究 — 幹先端処理に着目して —

A Fundamental Study in Adolescent Baum Testing:
Focusing on Apical Termination in a Baum Test

金沢 歩美

Ayumi Kanazawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：バウムテスト，青年期，アイデンティティ

Key words：Baum tests, adolescence, identity

1. 研究目的

バウムテストとは、A4版の紙に「実のなる木」を描いてもらうもので、紙と鉛筆があれば手軽に実施できる描画法である。バウムテストは描画者の自己像を表し、本人が気づいていない部分についても反映することがあるといわれている（岸本，2004など）。日本の心理臨床場面でもバウムテストはよく用いられ、研究も700本を超えようとしている（佐渡・坂本・岸本・伊藤，2010）。しかし、青年を対象としたバウムテスト研究は少ない（山田，2002）。現代青年は、自分の本当の姿を示さず（土居，2004）、自己感覚が希薄で体験を物語として語ることが難しい（鍋田，2007）と指摘されていることから、絵を介して描画者を理解できるバウムテストは現代青年を理解する上で有効であると考えられる。そこには青年を対象とした基礎的なバウムテスト研究が必要になる。そして、青年期を考える上で発達課題であるアイデンティティの問題は避けられない。また、描画は語りを促す一面があり（岸本，2006）、描画者の洞察が深まる（高橋，2007）とされていることから、語ることが難しい現代青年にとってバウムテストを介して対話をするには有用なのではないだろうか。

そこで本研究では、現代青年がバウムテストをどのように描くのかを検討し、アイデンティティとバウムテストの関連についても考察する。さらに、現代青年が自らを語る糸口としてバウムを介した面接がいかに有効か明らかにしたい。

2-1. 方法

調査対象者

某女子大学の大学生（2年生～4年生）182名。学年によって人数の偏りがあったため、本研究で

は2年生を低学年、3・4年生を高学年とする。

調査内容

①バウムテスト

②多次元自我同一性尺度（谷，2001）の抜粋
アイデンティティの形成程度を表し、得点が高いほど形成が進んでいると考えられる。

2-2. 結果と考察

【女子大学生のバウムテスト】

①女子大学生・低学年・高学年

女子大学生のバウムについてKochの58指標について中島（2008）の判定基準を参考に出現率を算出した。そして、出現率や時代間の比較から、女子大学生は「二線幹」「全二線枝」「実」「空中の実」「二線根」を描くことが多いと考えられた。また、低学年では「二線幹」「クーゲルクローネ」「実」「空中の実」、高学年では「二線幹」「全二線枝」「実」「空中の実」「二線根」の出現率が過半数を越えていた。これらの結果から女子大学生・低学年・高学年の描くバウムを想定してみると図1・2・3のようなバウムがイメージされる。

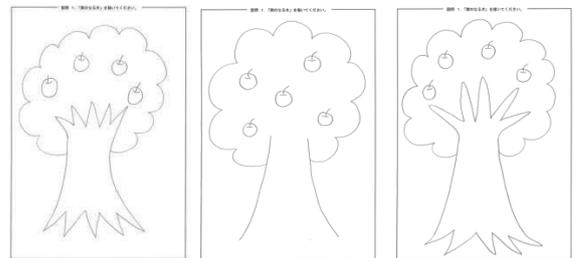


図1 女子大生 図2 低学年 図3 高学年

枝はアイデンティティのあり方を示すとされており（山中，2003など）、アイデンティティの形成が進んでいるほど枝が描かれ、枝分かれも多くなると思われる。女子大学生の描いた枝は図1のように幹先端を指状に少し枝分かれさせたものが

ほとんどであり、十分に伸びているとはいえないため、アイデンティティの形成の芽生えの段階と解釈することが相当であると思われた。また、低学年よりも高学年の方がアイデンティティの形成がすすんでいると考えるのが発達的に妥当であるため、バウムの枝の形態を慎重に検討することが、その学生のあり様をアイデンティティと関連付けて考えるときに有効であると示唆された。また、実は目標や成果を表すが（Koch, 1957 岸本他訳 2010など）、枝に実が直接ついておらず、どのように実っているのかわからないことから、自分自身の生き方と目標達成の意味付けが十分に理解しきれていないと思われた。

②幹先端処理

女子大学生は、幹の先端の処理について樹冠を形成する包冠線で幹先端を包んでしまう包冠という方略を用いている「冠型」と「冠漏洩型」を多く描いていた。包冠は、「外との関係をいかに作っていくか」「自らを周囲に対していかにように提示するか」という感覚が生じていることを意味する（奥田, 2005）。このことから、女子大学生は、自己をどう伸ばしていくかということよりも、周りにどう見せようかといったことに重きを置いているのではないかと推測された。

③全体印象

女子大学生のバウムについて臨床心理士6名で全体印象を評定した結果、女子大学生のバウムはいわゆる特徴がないバウムであると思われた。

【バウムテストとアイデンティティの関連】

尺度得点および下位尺度得点によって3群（低群・中群・高群）に分け、群間で指標の出現率に差がないか検討した。

その結果、アイデンティティのあり方を示すとされる枝の出現率について統計的に有意な差はみられなかった。よって、多次元自我同一性尺度の得点の高低とバウムの枝については、一義的な意味づけはできないことが分かった。

3-1. 方法（フィードバック面接）

面接対象者

希望者10名（2年生3名・4年生7名）

手続き

面接対象者の内、5名に対しては筆者と指導教官の2名で個別に面接を行い、残りの5名に対しては筆者のみで個別に面接を行った。

3-2. 結果と考察（フィードバック面接）

フィードバック面接の内容から、面接者がバウムを見て考えられることを伝えたり、バウムについて質問したりすると、描画者が自分のことについてそれが当てはまるのか、違うのか考えている様子が見られた。高橋（1986）のいうように、これまで描画者自身が気付かなかった考え方や欲求などを理解し、自己洞察が進むことがフィードバック面接を通して可能になったと考えられる。さらに、描画者の話を受けて面接者が連想をし、バウムとつなげて考えることで理解が深まった。このようにバウムを通して対話をすることで、現代青年を理解することができ、描画者自身も自分について考えるきっかけとなるのではないであろうか。

4. 今後の課題

本研究における課題として、バウムテストの指標の評定を他者との協議を少し行ったが、ほとんどは筆者のみで行った点があげられる。中島（2008）はKochの58指標について評定基準を定めているが、未だに曖昧なものがある。今後は、評定基準をより明確にするとともに複数人で評定することで評定の信頼性を高める必要があると考えられる。また、全体印象について本研究で用いた項目には評定の差異が大きい項目もあったことから項目の吟味が必要であるといえる。

今後、さらにバウムテストが現代青年を理解するための糸口となることが期待される。

主要参考文献

- [1] Koch, K. (1957). *Der Baumtest der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel 3 Auflage*. Bern: Hans Huber. (コッホ, K. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男(訳)・山中康裕(2010). バウムテスト 第3版——心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究 誠信書房.)
- [2] 中島ナオミ(2008). コッホのドイツ語原著における58指標の判定基準 関西福祉科学大学紀要, 12, 71-90.
- [3] 谷冬彦(2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成 教育心理学研究, 49(3), 265-273.

青年期毛沢東による倫理学の解釈

— ドイツ人哲学者パウルセンの著作, “*System der Ethik*” の翻訳に焦点をあてて —

The Interpretation of Ethics according to Mao Zedong in His Early Years:
Focusing on the Translation of *System der Ethik* by the German Philosopher Paulsen

金井 睦

Mutsumi Kanai

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード : Friedrich Paulsen, *System der Ethik*, 毛沢東, 哲学, 実践論

Key words : Friedrich Paulsen, *System der Ethik*, Mao Zedong, *On Practice*

1. 研究目的

ドイツ人哲学者・教育学者であるフリードリッヒ・パウルセン (Friedrich Paulsen 1848-1908) の著作 *System der Ethik* は、アメリカ人学者フランク・ティリー (Frank Thilly 1865-1934) によって英語に翻訳された後、1900年には日本人学者の蟹江義丸によって日本語に翻訳され、更に蔡元培 (1868-1895) によって中国語に重訳された。即ちドイツ語原文から始まり、翻訳には英語、日本語、中国語という段階を経ており、それらの翻訳の際には、翻訳者の都合によって割愛される部分が多くあった。

本論文の一つ目の目的は、日本語版と中国語版を取り上げ、日本語から中国語への翻訳の際に、どのような箇所が省略されたのかを明らかにすることであった。

二つ目の目的は、*System der Ethik* における西洋思想が、毛沢東 (1893-1976) によって如何に解釈されているのかということ、彼の残した言葉から分析することであった。

毛沢東は湖南省立第一師範学校の授業中、『倫理学原理』という題をつけられた中国語の翻訳書を読み、そこに大量の注釈を加えた。この批注は、毛沢東が西洋哲学の何を吸収し、何を吸収しなかったのか、或いは中国伝統思想を如何に改造しようとしていたのかを知る上で重要な手がかりとなるものである。

以上のような分析の結果、これが後の毛沢東思想に如何なる影響を及ぼしたのかの解明につながるのである。

2. 研究方法, 内容など

本論文の研究を進めるにあたって第一段階となったことは、蟹江による日本語『倫理学』が蔡元培によって中国語『伦理学原理』に翻訳される際、どの章のどの節が省略されたのかを見つけ出すことであった。これを明らかにしてゆくことによって、中国語『伦理学原理』が「第三章 厭世主義」以外は1900年に出版された『倫理学』より翻訳されたことが証明することができた。第三章は日本語に翻訳される時に、蟹江によって割愛されたが、1904年に蟹江と他の学者によって共同翻訳された『倫理学大系』には記載されている。これを明らかにしたことにより、中国語の第三章は『倫理学大系』により翻訳され、それ以外は『倫理学』によるものであることを証明することができた。

次に日本語版と中国語版の序論、第四章、第五章の本文を引用しながら、それぞれの箇所に書かれた毛沢東の批注を取り上げた。その際、中国語本文と毛沢東の批注は日本語に翻訳しながら説明したが、概念として不明である点に関しては、ドイツ語原文、英語翻訳版も引用することがあった。

毛沢東批注を分析するに当たって、後の1937年に執筆された『実践論』の内容を取り上げ比較した。

序論の主な内容は、倫理学という学問についての説明であり、第四章は人間の生と死、第五章は人間の自然衝動と義務感情に関する論であった。これらの章は『実践論』にも結びつく内容であり、毛沢東の批注からは『実践論』の基盤となる考え方を読み取ることができた。

3. 研究の結果、目的の達成状況など

毛沢東にとってパウルセンの倫理学は、彼がこれまで学んできた西洋思想と中国思想の間の距離を埋める役割を果たした。更に一つの体系を持つ西洋哲学書の鏡に映してみることで、彼が抱いていた漠然とした思想をとらえなおすことにつながったといえる。すなわち『倫理学原理』の価値は、毛沢東思想の核が如何に形成されたのかを解読することができるという点である。

『実践論』では、個々人の認識が真理であることを証明するためには、「理論—実践—理論」という循環型の形式を繰り返すことが必要であったが、これは『倫理学原理』序論の批注にも見られる思想である。

『倫理学原理』第四章では、人間の生と死に関する考察がされているが、毛沢東は「死」を恐れる対象ではないと主張した。このような姿勢は革命思想にも結びつくものであって、『実践論』にも結びつけることができる。

第五章では主に精神の個人主義に関して述べられた。批注では、人生の目的とは十分に自己の身体及び精神の諸能力を発展させ、最高に至らしめることであるとした。『実践論』では、実践能力と認識能力を無限に発展させる主観能動性の必要性が説かれ、批注の個人主義が発展したものであるといえる。

以上のことから『倫理学原理』は、『実践論』にも影響を与えているといえ、『倫理学原理』が毛沢東思想の基盤となったことを証明した。

すなわち、パウルセンの*System der Ethik*は、青年毛沢東が学んできた中国伝統思想と、マルクス主義を取り入れた『実践論』の思想にたどり着くまでの接着剤という役割を果たしたことが明らかとなった。毛沢東の社会主義思想到達には、これまで、あまり研究されてこなかったパウルセンの思想も関与していたのである。

これらの研究結果から、毛沢東思想への影響の解明という当初の目的が達成されたといえる。

4. まとめと今後の課題

これからの研究では、19世紀のドイツのマルクス (Karl Marx 1818-1883) やエンゲルス (Friedrich Engels 1820-1895) といった人物に焦点をあてて、彼らの思想を分析することを目的とする。なぜな

ら、同時代に生きたパウルセンは彼らから影響を受けている可能性が考えられるからである。そこで、パウルセンと彼らの思想を比較分析することを主な研究テーマとし、パウルセンの思想の基盤となったものは何であるかを“*System der Ethik*”以外の彼の著作も使いながら読み取り、その思想が当時のドイツ社会に如何に位置づけられ、どれほどの影響力を持っていたのかということ調べてゆきたい。

更に、パウルセンがマルクス・エンゲルスの影響を受けていたのであれば、それが意識的であれ、無意識であれ、青年毛沢東にどれほどの影響を与えたといえるのかを研究することも必要となってくる。

毛沢東思想は、名称が異なることから見ても分かるように、マルクス主義とは異なるものである。以上のような研究を行えば、『実践論』が純粋にマルクス主義だけを継承したのではないことの証明ができる可能性がある。そして、社会主義者として毛沢東に影響を与えた人物としての、パウルセンの立場がより明確化させることとなるはずである。

主要参考文献 (著書、学術雑誌)

- [1] Friedrich Paulsen (1896) *System Der Ethik Mit Einem Umriss Der Staats-Und Gesellschaftslehre, Volume I* Berlin
- [2] Friedrich Paulsen, English translation by Frank Thilly (1899) *A System Of Ethics* Printed in the United States of America
- [3] 中共中央文献研究室中共湖南省委《毛泽东早期文稿》编辑组编(1990)『毛泽东早期文稿 1912・6-1920・11』中国湖南出版社出版
- [4] フリードリッヒ・パウルセン著、蟹江義丸訳 (1900)『倫理学』博文館
- [5] 西順蔵編 (1976)『原典中国近代思想史 第五冊』岩波書店

心理臨床場面におけるセラピストの効果的な自己開示に関する研究

Research on a Therapist's Effective Self-disclosure in a Psychotherapy Situation

栗田 麻美

Asami Kurita

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：セラピストの自己開示，心理臨床場面，介入技法

Key words : therapist self-disclosure, psychotherapy, intervention techniques

1. 研究目的

心理療法について、水島（1985）は「カウンセリングが深まるにつれて、常識の枠を超えて、なまの心と心がぶつかり、このためクライアントは深い自分自身の姿に直面することになるのである。」と述べている。「なまの心と心」がぶつかるためには、クライアントだけではなく、セラピストもなまの心をさらけ出すこと、つまりセラピストが「感じたことや考えていることを伝えること」が必要であるといえる。このことを広い一般的な心理学用語に置き換えると、「自己開示」という概念に相当する。自己開示とは、社会心理学の用語の一つであり、Jourard（1971）によって提唱され、「自分自身をあらわにする行為であり、他人たちが知覚するように自身を示す行為である」と定義されている。

心理療法における自己開示には、クライアントが行うことと、セラピストが介入として行うことがあり、それぞれが持つ意義や効果は異なる。まず、クライアントがセラピーの中で自己開示を行うことができるようになるということは、パーソナリティ健康を達成する手段である（Jourard, 1971）。そして、セラピストが自己開示を行うことについては、肯定的立場と否定的立場が存在している。否定的立場に立つ者たちは、Freudの見解「blank screen」を含んでおり、クライアントに対して曖昧なままであるべきであると主張している（Bottrill, et al., 2010）。一方、肯定的立場に立つ者たちは、対等に向き合い、治療同盟を高め、あるいは異なる考え方や行動の選択肢を提示することに活用し、クライアントが行うのと同じような自己開示、クライアントに支持的に向き合い勇気づけるような自己開示が特に適切であることを述べている（Hill and Knox, 2002）。これらの立場

を踏まえ、自己開示を行うのであれば、セラピーの進行状況やクライアントの病態を考慮したうえで、セラピストが意図を持って行うことが重要なのではないかと考える。

そこで、本研究におけるセラピストが行う自己開示を、「セラピー中にセラピストの介入技法として、セラピストが意図したうえで、セラピスト自身の性格や身体的特徴、経験についての話（事実の開示）や、クライアントやセラピーについて考えたこと・感じたことについての話（自己を含んだ開示）をすること」と定義した。

本研究は、セラピストのどのような自己開示が、クライアントの不安を軽減し、自己開示・自己理解・変化などを促進することに繋がる効果的な自己開示となるのかを明らかにする。またそれに伴い、セラピストのどのような自己開示が効果的な自己開示とならないのかについても明らかにすることを目的とした。さらに、クライアントの病態やセラピーの時期（前・中・後）、セラピスト・クライアント関係という視点が重要な視点となるのではないかと考えるため、この点についても検討した。

2. 研究方法、内容など

研究対象は、心理面接4事例とそのセラピストとクライアント（元クライアント）とした。代表的なセッションのトランスクリプトの分析を基に、セラピストに対しては、インタビュー調査と記述調査を行い、クライアント・元クライアントに対しては、インタビュー調査を行った。なお、インタビュー調査は、Interpersonal Process Recall（以下、IPRとする）の手法を参考に行った。データ分析は、イベント・パラダイムの考え方とKJ法の手法を参考に、セラピストの自己開示を分類した後

に、セラピストの介入ごとの効果、ケースの時期別による効果の比較、クライアントの病態水準による効果の比較を行った。

3. 研究の結果、目的の達成状況など

分析を行った結果、セラピストの自己開示がクライアントにとって効果的に働く場面と、効果的ではない場面が見出された。

効果的に働く場面の条件としては、まず、クライアントがセラピストに対して基本的な信頼感を感じることができていることが、その基礎となる。この基本的な信頼感を構築することができていない場面で自己開示を用いても効果的に作用することはないと示唆された。

さらに、クライアントの“here and now”の感情にそった自己開示であることが重要だと考える。“here and now”の感情にそった自己開示であれば、クライアントもセラピストの自己開示を効果的に受け止められるが、そうでない場合には、クライアントはセラピストの自己開示を受け止めることができないと考えられる。

次に、病態水準によって効果的に働く場面に差異があるのかという点に着目した。神経症水準であれば、セラピストが行った自己開示を効果的に受け入れることができる反面、その裏には受け入れることができない側面が生じていることが推測された。そのため、セラピストはその点を踏まえたくて介入に用いることが必要だと考える。さらに、境界例水準の人格障害のように病態水準が重くなるにつれ、《事実の開示》を行うよりも《自己を含んだ開示》を行う方が、良好なセラピストクライアント関係を築くためにも、クライアントが自己理解を深めるためにも、効果的なのではないかと考える。

加えて、セラピストとクライアントの年齢や性別という属性による効果の比較を行った。その結果、クライアントの属性によってセラピストについての捉え方が異なるために、セラピストの自己開示の効果にも差異があることが明らかとなった。よって、セラピストは自身の属性とクライアントの属性との関係性を考慮したうえで、自己開示を用いることが求められるのではないかと考えられる。

4. 今後の課題

まず取り上げるべき点として、本研究で使用し

た4ケースはすべて同一のセラピストによるケースであったため、他のセラピストがどのように自己開示に意図を持ち、介入技法に用いているのかという視点が欠けている点があげられる。加えて、自己開示には性役割という視点も存在しているため、セラピストの性別によっても現れる効果に差異があると考えられる。そのためこの点については、今後他のセラピストの協力を得ることができれば、より有用性の高い研究となりうるだろう。

加えて、本研究ではケースごとにセッションの時期における効果の比較検討を行ったが、正確に前期・中期・後期のデータを得ることができなかったため、今後はこの点を改善していけたら良いと考える。

病態水準による検討を行ったが、各水準に対して1ケースしか対象とできなかった為、今後は各水準に複数ケースの事例を用いることができれば、より正確な効果を明らかにしていけるのではないかと考える。

そして、今回は実際のセッションが行われてから数年がたつてからのインタビュー調査となったため、セラピスト・クライアントともに“その瞬間に感じていたこと”ではなく、“おそらくその当時はこう感じていた”と思われることを、インタビューでは調査した。今後はIPRの方法のように、セッション終了時にインタビューを行うことで、より正確な感情体験について明らかにしていくことができるのではないかと考える。

主要参考文献（著書、学術雑誌）

- [1] Hill, Clara E., and Knox, Sarah. (2002). Self-Disclosure. John C. Norcross. (Ed.) *Psychotherapy Relationships That Work : Therapist Contributions and Responsiveness to Patients*. New York : Oxford University Press. pp.255-265.
- [2] Jourard, Sidney. M. (1971). *The Transparent Self*. New York : Litton Educational Publishing. (ジュラード シドニー M. 岡堂哲雄(訳) (1974). 透明なる自己 誠信書房) pp.24-38.
- [3] Samantha Bottrill., Nancy Pistrang, Chris Barker. & Michael Worrell. (2010). The use of therapist self-disclosure: Clinical psychology trainees' experiences. *Psychotherapy Research*, 20, 165-180.

対馬の伝統食品「せんだんご」の食文化とその調理科学的研究

A Culinary Research Study on the Food Culture of the Traditional Dish *Sendango* of Tsushima

柳瀬 弘子

Hiroko Yanase

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：対馬，伝統食品，せんだんご，さつまいも，発酵，調理特性

Key words : Tsushima Island, traditional dishes, *sendango*, *satsuma imo*, fermentation, cooking properties

1. 研究目的

新大陸を原産地とするさつまいもの栽培は、わが国では救荒食として江戸時代に普及した。対馬には、1715年原田三郎右衛門により導入され、不足する穀物の貴重な代用食となった。対馬は、地形的に農耕に適さなかったことから米が取れず、さつまいもが大切な主食であり食糧源であった。さつまいもを「孝行いも」と呼んでいたことから、その重要性が分かる。対馬におけるさつまいもの利用は、世界でも他に類を見ないほど多様であった。収穫したいもをそのまま人間の食糧や家畜の飼料とするだけでなく、切干しにして保存性を高めたり、いもからでんぷんを取りだしたり加工食品も作られた。なかでも、小さな屑さつまいもを発酵させて作る“せんだんご”は、さつまいもを無駄なく有効利用する最たる事例である。“せんだんご”は、でんぷんの種類であり、対馬の代表的な伝統食品である。しかし、今日農業従事者の減少によりさつまいもの生産量が減少している。また、“せんだんご”の製造には、手間と時間を要し、製造者が高齢化していることから、その製造の継承が難しくなっている。さらに、現代人の食嗜好が変化してきていることなどにより、対馬における“せんだんご”の継承が危ぶまれている。

そこで、本研究では、日本の伝統食品である対馬の“せんだんご”の現状を把握し、その特徴を解明することで継承の方向性を探ることを目的とした。

2. 研究方法

<食文化研究>

- 1 文献調査：世界および日本におけるさつまいもの利用方法を収集・整理した。
- 2 現地調査：対馬市3地区の農家，市役所，振興局，

寺の檀家，商店などを対象として，せんだんごの製造方法および伝統的なせんだんご料理を記録した。

- 3 アンケート調査：伝統食品への意識およびせんだんごの喫食状況を把握するために，対馬市立小学5年生（302名）とその保護者である大人世代（234名）を対象として留め置き式によるアンケート調査を2012年2～3月に実施した。集計と解析は，統計用ソフトSPSS20を用い，単純集計，クロス集計，コレスポンデンス分析，相関分析を行った。クロス集計の解析には，Pearsonの χ^2 検定あるいはWilcoxonの順位和検定を用いた。

<調理科学的研究>

1 「せんだんご」の調理特性の検討

（実験材料）せんだんご，さつまいもでんぷん，さつまいも粉の3種類のでんぷん試料
（実験方法）

（1）物性測定：でんぷん試料に水を加えて1～15%濃度に調節した懸濁液を一定条件で加熱・糊化し，ゾル・ゲルを調製した。レオメーターにより，40℃下のゾル・ゲルのかたさ，凝集性，附着性を測定した。また，10および20%砂糖添加糊液のゾル・ゲル物性についても比較検討した。さらに，モデル試料としてでんぷん試料15%，砂糖10%濃度のういろう様ゲルを調製し，その特性を破断試験結果から分析した。

（2）熱分析：3試料の糊化特性を示差走査熱量計（DSC）により測定した。

3. 研究の結果

<食文化研究>

文献調査の結果から，屑さつまいもを発酵させていもの組織からでんぷんを取り出して作る“せ

んだんご”は、極めて特異なさつまいもの利用方法であることが確認された。微生物作用を利用した“せんだんご”の製法は、自家製であり、各家庭における製造方法は厳密に同一ではない。そこで、本研究の試料提供者であり、“せんだんご”料理名人の製造方法を現地調査により記録した。多くの時間と労力を費やす製造工程を体験することで、製造者が減少している現状の要因が窺えた。

現在、製造者の減少と嗜好の変化などで“せんだんご”の存続が危ぶまれる状態である。伝統食品“せんだんご”を継承していくための解決策の糸口を見つけ出すことを目指して、まず、対馬における“せんだんご”の喫食状況を把握するためにアンケート調査を実施した。その結果、対馬の伝統食品“せんだんご”の認知度は、大人世代91.5%に比較して子供世代は48.2%と有意に低かった。また、4種の伝統的なせんだんご料理の喫食状況は、世代間で違いが認められた。例えば、“せんだんご”料理の中で最も好まれた、押し出し麺料理であるろくべえは、大人世代では手作りが多かったが、子ども世代では給食が多く、料理の調達方法が異なった。また、子ども世代はろくべえを副食として食べているが、大人世代では、主食として食べている割合が多いことも特徴であった。このような世代間の喫食状況の相違は、対馬の家庭内の食生活において“せんだんご”の継承が難しくなっていることを示唆するものである。一方、対馬の伝統食品を次世代に継承する手段として、学校給食が重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

アンケート調査結果の分析から、“せんだんご”料理の喫食頻度と嗜好性との間には正の相関が認められ、伝統食品の受容性を向上させるためには、食経験を積むことが極めて肝要であることが確かめられた。

<調理科学的研究>

“せんだんご”の調理特性を明らかにするために、さつまいもから調製した“せんだんご”、さつまいもでんぷん、さつまいも粉の3種類のでんぷん試料を用いて、基本的な物性を検討した。まず、一般成分を比較すると、3試料とも主要成分は炭水化物であるが、そのうちの食物繊維含量は、“せんだんご” 2.4g、でんぷん0g、さつまいも粉 8.1g/100gであった。また、“せんだんご”のたんぱく質、脂質、灰分量ともに、さつまいも粉より少なく、これは水晒し工程による成分の流出が原

因とみなされた。また、光学顕微鏡で試料粉末を観察したところ、“せんだんご”ではでんぷん粒子と細かい食物繊維の存在が認められた。

3 試料から調製した濃度0~15%糊液をレオナーを用いた介護食物性測定条件で比較した。その結果、いずれの試料においても、でんぷん試料濃度7%以上で糊液はゲル化していた。ゾルおよびゲルのかたさおよび付着性は、いずれの試料においても試料濃度の増加に伴い漸次増加した。なお、いずれの濃度においても“せんだんご”のかたさは、他の試料に比べて値が高かった。

次に、使用目的を考慮し砂糖添加の影響を検討した。その結果、いずれの試料においても砂糖濃度が0, 10, 20%と増加するにつれて、かたさおよび付着性が増加する傾向が見られた。なお、砂糖添加により、いずれの試料も加熱操作が容易になった。

さらに、モデル試料としてでんぷん試料15%、砂糖10%濃度のういろう様ゲルの物性を比較した。その結果、“せんだんご”は、破断応力、破断歪率、破断エネルギーの値がいずれも高く、他の試料に比べて弾力があり、噛みごたえのある、かたいゲルであることが明らかとなった。一方、さつまいも粉は、全ての項目において値が低く、脆く、噛みごたえのないゲルであった。以上の結果から、発酵法で作られる“せんだんご”は、さつまいもから製造された他のでんぷん試料とは糊液物性が異なることが明らかにされた。

DSCを用いて3試料間の糊化特性を比較した。その結果、試料によりでんぷんの吸熱ピークパターンに違いが認められた。せんだんごの糊化開始温度、糊化ピーク温度、そして、糊化終了温度は、それぞれ65.30℃、72.45℃、80.19℃であり、さつまいも粉の71.17℃、77.64℃、83.66℃より有意に低かった。また、せんだんごの吸熱ピークには、糊化ピークの低温側にショルダが観察された。これらの結果から、製造方法の違いがでんぷんの糊化現象に影響を及ぼすこと、せんだんごのでんぷんは熱感受性が高いことが示された。

4. まとめと今後の課題

対馬の伝統食品“せんだんご”の継承には、その調理特性を活かし、各々の世代に受け入れられるせんだんご料理を提案することが肝要なことと考える。今後は対馬市に対して研究成果を報告するとともに、伝統食品継承のための方策の提案を試みてゆきたい。

笑う若者

—お笑い番組と若者の人間関係の関連についての考察—

An Investigation on the Connection Between Young People's Relationship and *Owarai* Programs

深町 敦美

Atsumi Fukamachi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 情報コミュニケーション専修

キーワード：お笑い番組，若者，キャラ化，スクールカースト，島宇宙

Key words : TV comedy programs, adolescents, characterization, school caste, island universe

1. はじめに

本研究においては、日本のお笑い番組と若者の人間関係の変化を社会背景とともに論じながら、お笑い芸人を目指す「芸人の卵」である若者へのインタビューと、高校生へのインタビューを通して、お笑い番組と若者の人間関係の関連について考察することが目的であった。

本研究では、現代の若者の人間関係の中における「場の空気を読む」、「キャラ化」という現象や、教室内に身分のような形で、個人の立場を暗黙の内に決定してしまう「スクールカースト」、自分のグループ以外の人との交流を断つ「島宇宙化」などの理論に注目している。空気を読むという点において、特に高度な技術を持っているのは、お笑い芸人なのではないだろうか。テレビが普及するようになって、そうしたお笑いの世界を素人が日常的に見られる機会が増えた。特に学校の教室では、昨日見たテレビ番組が話題に上ることも多い。

若者たちとテレビのお笑い番組には、影響関係があると考えられる。空気を読むことに気を遣うのは、お笑いの模倣なのかもしれない。一方で、お笑いも素人の若者を取り込み、相互に影響関係は強くなっていったとも考えられる。

2. 若者の世界の変化

社会背景や学校教育も変化している。戦後復興期から高度経済成長へ向かう時期にあった「がんばり至上主義」は、いい学校・いい会社に入れば安定した人生が保証されるような景気状況があったため、努力すれば報われることを示していた。学生運動も起こり、若者の元気な時代であった。就職する頃には「金の卵」と呼ばれ、若い力がもてはやされていた。バブル期に入ると、国全体が豊かになった。ブランドブームにも象徴されるように、人と差をつけたい願望が大きくなっていったように思われる。そうした時代を経て、バブル

崩壊後の不景気がやってきた。若者たちは、努力して勉強して、いい大学に入っても就職難にぶち当たることとなった。「ハイパー・メリトクラシー」といわれるように、今の若者は基礎的な学力だけでなく、個性や創造性といった、努力だけで獲得するには難しい能力が求められるようになった。がんばっても報われない時代の到来であろう。工業化がすすんだ頃から「脱つめこみ教育」は推し進められてきたが、ついに「ゆとり教育」が登場することとなった。もはや学校は就職するための訓練機関ではなく、若者たちにとって「居場所化」していった。

こうした学校の居場所化や個性化教育の産物ともいえる現象が土井(2009)のいう「優しい関係」なのではないだろうか。勉強の競争はあまり意味がなく、個性を認めなくてはいけないのであれば、誰も傷つけてはいけない、私も傷つきたくない。そんな考え方が、生まれたのかもしれない。「スクールカースト」や「島宇宙」、「キャラ化」でさえも、「優しい関係」に一役買っているのだろう。

3. お笑い番組の変貌

一方で、「空気」や「キャラ」という表現がよく使用される現場としての「お笑い」にも着目した。若者がお笑い番組に触れる機会も多いと考えられ、お笑い番組の変遷について調べていく必要があった。お笑い番組の研究によると、寄席などで落語や漫才が流行していた時代のお笑い番組は、師弟関係を結んだ落語家をはじめ、脚本あり舞台ありきの「くろうとの芸」といえるものが多かった。

1970年代に萩本欽一が番組の中で、街頭にいる素人をつかまえてタイトルコールをさせた頃から、お笑い番組に素人が進出をはじめた。スタッフがコントに参加したり、募集した素人を集めて恋愛ゲームを行ったりする番組が人気を博した。

つまりお笑い番組は、素人が参加したりドキュメンタリーの要素を取り入れたり、細かな演出

や決まった脚本を使った芸ではなく“素”を引き出して笑いを取るものが増えていったようである。

また、お笑い芸人も、人から蔑まれる存在から憧れられる存在となっていく、高学歴のエリート芸人もみられるようになった。芸人の養成所は、お笑い芸人に憧れる若者たちにとって大学や専門学校と同じような選択肢の一つになったかもしれない。お笑い番組と若者は、相互に関係を深めていったようにも考えられる。お笑いが日常と地続きの存在になってきたのではないだろうか。

4. 高校生、お笑い芸人の卵へのインタビュー

現在の若者の生の声を聞くために、芸人の卵である若者3名と、同じ高校に通う吹奏楽部の高校生4名へのインタビューを行なった。実施時期は2012年の7月～8月で、所要時間は、1名につき30分程度であった。質問をあらかじめ用意したが、話の流れの中で適宜、質問を増やしたり、内容を掘り下げたりする半構造化面接の形式をとった。

芸人を目指す若者たちには「お笑い」、「空気」、「キャラ化」といったことを中心として、芸人を目指した経緯やそれに伴って発生した出来事について聞いた。高校生には「お笑い」、「空気」、「キャラ化」の他にも「スクールカースト」や「仲良しグループ（島宇宙）」について聞いた。

芸人を目指す若者たちに共通していたことは、お笑いファンだからというよりも、自ら舞台に立った経験から自信をつけて、芸人の養成所に進む道を選んだということであった。3名とも中学・高校時代に、文化祭やアマチュアの漫才大会などで舞台に立つということを何度か経験していた。

お笑い芸人の芸が伝統的な技というよりかは、文化祭の延長線上に見えるほど、それぞれの素を活かしたものであるのかもしれない。お笑い番組に素が多様されてきたことや、個性化教育、ハイパー・メリトクラシーといった「個性」を大切にしている社会背景とマッチしたような状況が浮かび上がった。一方で、学歴が異なっていた3名の中では、学歴の高い人ほど周囲からの反発が強くあり、学歴社会の認識はまだ強いものであるようだった。しかし、「好きなことを仕事にしたい」という考え方は、努力しても報われない時代において珍しいことではないと考えられる。確実に安定した就職ができる保証がないのなら、不安定でも好きなことをやる道を選んだ方が、生き甲斐も生まれるのかもしれない。

高校生4名の中には、お笑いファンである生徒が1名おり、その生徒が中心となって友人に「お笑いノリ」を広めているようであった。特に仲間うちで盛り上がった時に、お笑い芸人のような高

いテンションで話すことがあるようだった。キャラ化については、意識する度合いには差があったが、それでも4名を区別できるキャラがあったと思われる。個性を示すといった意味では、「キャラ化」も個性化教育の産物でもあるだろう。こうしたことは、最近のお笑い番組において芸人の素を利用したような笑いが、「キャラ」といった個性を大切にしていることともリンクしているようにも感じられた。また、「スクールカースト」や「島宇宙」に関しては、高校生も日常的に感じ取っているようであった。友だち地獄というほどでもないが、人間関係に気を遣っていることがうかがえた。

5. おわりに

本研究において、お笑い番組と若者の人間関係は、社会背景や学校教育の変化などと関連がみられることがいえるだろう。しかしお笑いブームと呼ばれた現象は下火になってきており、芸が“くろうと”のものでなく、素を活かした“キャラ”に変わってきていることや、お笑い番組がトークやゲームをメインとした番組が増えてきている。

最近「ネタ見せ番組」も減り、お笑い芸人は芸を見せるというより、バラエティー番組などで面白いことをいう「キャラ」になったのではないだろうか。漫才やコントなどのネタを直接見なければ、劇場へ足を運ぶ必要があるのかもしれない。プロレスがそうなったように、お笑いも年末年始くらいしか、ネタ見せをしなくなるのだろうか。まるで、お笑いの起源であった、年始に民家を訪ね歩く「万歳」に戻っていくようである。

主要参考文献

- [1]土井隆義 (2009) 『キャラ化する／される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』岩波書店。
- [2]本田由紀 (2005) 『日本の〈現代〉13 多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版。
- [3]小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編 (2012) 『若者の現在——文化』日本図書センター。
- [4]宮台真司 (2006) 『制服少女たちの選択——After 10 Years』朝日新聞社。
- [5]太田省一 (2002) 『社会は笑う——ボケとツッコミの人間関係』青弓社。
- [6]鶴見俊輔 (1979) 『太夫才蔵伝——漫才をつらぬくもの』平凡社。
- [7]山口昌男, 2007, 『いじめの記号論』岩波書店。

ダウン症児出生に伴う親の障害受容過程とソーシャルサポートとの関連

Relationship Between the Process of Parents' Acceptance of Obstacles and Social Supports with the Birth of a Down's Syndrome Child

佐取 朋子

Tomoko Satori

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：ダウン症、障害受容過程、心理的葛藤、ソーシャルサポート

Key words : Down's syndrome, obstacle acceptance process, psychological conflict, social supports

1. 目的

筆者は将来、臨床心理士として障害児とご家族の支援を行いたいと考えている。ボランティア活動やダウン症児の親の会で、ダウン症児のご家族の支援の必要性を感じた。

1970年代から、障害児の親の障害受容が注目されてきた。障害受容の本質を、玉井・小野(1994)は、「障害児の出生という、親個人にとっての喪失体験であると同時に、家族全体の危機状況を、心理的段階と時間的経過を経て克服し、最終的に障害への価値転換に至ることと、それまでの過程を含む概念」とした。また、障害児の予期せぬ出現に、親は思い描いた健常児像と健常児を産めるはずの自分に期待した母親像を失う（二重の対象喪失）とする見方もある（玉井, 1994）。一方、障害受容過程は、段階説、慢性的悲哀説、螺旋形モデルが提案されている。Drotar et al. (1975) は、段階説に立ち、先天異常児誕生への親の反応をショック、否認、悲しみと怒りと不安、適応、再起に分けた。また、田中・丹羽 (1990) も、ダウン症児の親の障害受容過程は、①第1の感情反応②第1の感情反応からの立ち直り③第2の感情反応④第2の感情反応からの立ち直り⑤転換期とした。

ところで、親の障害受容過程に関連し、ソーシャルサポートが重要である。ソーシャルサポートは、サポート源（配偶者等）と内容（情緒・実質）に分類される（吉田, 2004）。石本・太井 (2008) は家族などからの情緒サポートや専門機関の実質サポートが親の障害受容を促すとした。障害告知について、横山 (2004) は、告知は1か月健診後や母親が「何か変だと感じた時」が適時とした。また、受容過程の中で、田中・丹羽 (1990) は、子どもからの微弱なサインに母親が気づくことの繰り返しが子どもの精神発達と母親の子どもの見る姿勢を育むとした。三木 (2012) も、発達に応じた療育支援や子どもに合った生活配慮の支援が、子ど

ものいいところ探しなど、異視点による気づきにつながるとした。一方、障害のない子どもを産み、障害のない子どもの親という実感をした気持ちや、第二子出産の動機になる（後藤他, 1986）ことや、親が障害児とそのきょうだいを育てる際、親なりにきょうだいを理解し対応しても限界があり、障害児へのケアの優先によるネガティブな感情が問題となり、親自身も心理的葛藤が生じる（小宮山他, 2008）など指摘され、この点、障害児をもつ親へのソーシャルサポートとして重要である。

そこで、本研究では、ダウン症児出生に伴う親の障害受容過程とソーシャルサポートとの関連を検討する。本研究で明らかにしたいことは①ダウン症児出生に伴う親の障害受容過程（田中・丹羽 (1990) とDrotar et al. (1975) の検討、両者の理論的関連を検討）②第二子出産・きょうだいへの親の思い③ダウン症児出生に伴う親の障害受容過程を促進するソーシャルサポート、であった。

2. 方法

ダウン症児の親の会に参加するダウン症児の母親4名に、1対1の半構造化面接を行った。調査は2012年10月から11月に実施し、場所は親の会の開催場所の一室をお借りして使用した。分析は、KJ法（川喜多, 1967）に準じた方法で行った。

3. 結果と考察

ダウン症児出生に伴う親の障害受容過程における田中・丹羽 (1990) の仮説検討の結果、1期以外仮説通りであった。1期の感情反応は「怒りや絶望感」「方向喪失感」「あせり」「不安感」が共通していたが、「悲しみ」「おそれ」「存在の否定」「保護」「罰があたる」「自分自身の生活が崩される不安感」は見られなかった。また、田中・丹羽 (1990) に含まれない「覚悟」も生じていた。

親は、想定外の障害児の誕生に、怒りや絶望感を抱き、障害の知識の無さから、ダウン症児の育て方が分からず、方向喪失感や不安感を抱いたと

考えられる。一方、子どもは日々成長するため、育てなければと焦りが生じたと考えられる。

以下、田中・丹羽（1990）の段階ごとに必要とされるサポート等明らかになったことを記載する。

ソーシャルサポートに関しては、家族や母親仲間が障害児と自分を受け入れ、専門家による「障害児の誕生には意味がある」の声かけで、障害の意味に気づき、障害児や自分への思いが肯定的となり、障害受容を促進させた。また、障害告知前、ダウン症が疑われた場合、告知で疑いが晴れ、ダウン症児を育てる覚悟が定まった。つまり、サポートの時期は、横山（2004）の指摘と同様、障害告知は、母親が「何か変だと感じた時」が適時となる。

第2期は、子ども同士の発達に大差がない。そのため、親は子どもの障害への自覚が薄れ、子どもを“特別な障害をもつ人”の枠に入れたくない、健常児との遅れを少なくしようと子どもに色々な体験をさせていたと考えられる。サポートとしては、子どもの発達を促進させようと働きかける親にとって、専門家による子どもの総合的理解、成長を促進させる支援が重要であろう。この支援は、三木（2012）や田中・丹羽（1990）の指摘と同様、子どもを肯定的に捉える新しい視点となる。

第3期は、健常児やダウン症児との成長の開きが明確となり、周囲との軋轢や精神的疲労の蓄積が起り、親はその事実を受け入れざるを得ない状況に陥る。この時期、三木（2012）や田中・丹羽（1990）が言うように、専門家や母親仲間が子どものできる面を認め、障害の知識や育児情報を共有することで、子どもの発達評価の基準を変更し、障害に対して諦め、受容することが可能となる。

第4期は、子どもの頑張る姿や遅くても成長する様子を専門家と共有することで、子どもにとって何が必要かを考え、子どもの特性を活かせる物事を選択を行うようになることが示唆された。

第5期は、親が障害への新たな価値観を確立する時期である。1歳児の親は、過去の障害への認識回想に留まるが、学齢以降の親は、障害児の誕生を受け止め、障害への考え方を修正する。そして、自分の成長を実感し、自分の役割を果たし、現実を受け止めていくことが示唆された。よって、障害への価値転換がなされたと考えられる。

次に、Drotar et al.（1975）の仮説検討の結果、第1期ではほぼ全ての現象が生じ、第4期以降、感情反応は減少していた。Cはショック→否認→再起、第2期以降は適応と判断され、Dは第2期から抑うつと適応が生じていた。Aはショックと再起が第1期に同時に生じ、第2期に適応と再起、第3期から第5期は適応段階にいた。Bは第3、4期に怒り

や不安が見られ、第1期から適応が始まり、第5期に至り、再起が見られた。

親は、子どもは五体満足に生まれてくると考えていたため、自分に障害児が生まれた事実や、子どもが障害児であることが信じられない。そのため、二重の対象喪失（玉井，1994）を体験したと推測される。しかし、ショックと再起、適応の同時生起を考えると、現実問題の解決が優先でそれ自体がショックの否認になった可能性がある。従って、子どもの発達の節目ごとに悲哀が再燃されて喪失反応が生じると推察され、慢性的悲哀説を裏付ける結果となったのではないかと考えられる。

第二子出産・きょうだいへの思いは、「次の子がダウン症でも意味がある。障害を、きょうだいは、恥ずかしいと思わないでほしい」「子育てに障害あるなし関係ない。きょうだいがいるからダウン症児への見方が寛大になる」「親亡き後は、きょうだいで支えてほしい」「親から、きょうだいは障害児のようにして貰えないので可哀そう」であった。

第二子出産の動機は、後藤他（1986）の指摘と異なり、親亡き後のダウン症児の将来への不安を軽減させるためであったと推察される。また、小宮山他（2008）同様、親は、親から注目されない不満やダウン症児に合わせる我慢をきょうだいが抱いていることに気づき、罪悪感を抱いていたことが示唆された。一方、親は、ダウン症児とそのきょうだいを育てることで、ダウン症児と健常児の育て方は同様であることに気づき、きょうだいの存在により、ダウン症児への見方が寛大になり、障害受容を促進していたと考えられる。そして、親が障害を受容すると、きょうだいにも、障害に偏見のない大人になるよう願うことが示唆された。

4. まとめと今後の課題

ダウン症児出生に伴う親の障害受容過程とは、危機の連鎖であり、それに対する他者のサポートと障害児や自己を受け止めていく認知変容の問題と捉えられる。本研究は、学童期までを分析対象とし、事例数が少数であるため、今後は、多くの事例から学童期以降の問題と有効なサポートを検討し、ダウン症児とご家族への理解につなげたい。

主要引用参考文献

- [1]田中千穂子・丹羽淑子(1990). ダウン症児に対する母親の受容過程 心理臨床学研究, 7 (3), 68-80.

管理栄養士のコミュニケーション能力向上と構成的グループエンカウンターによる体験学習効果

The Effects of Experiential Learning by Structured Group Encounter and Improvement of the Communicative Abilities of Dieticians

吉田 真知子

Machiko Yoshida

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：管理栄養士，コミュニケーション，構成的グループエンカウンター，栄養教育

Key words : certified dieticians, structured group encounter, nutrition education

1. 背景と研究目的

管理栄養士養成では、2002年改訂管理栄養士養成カリキュラムおよび2009年管理栄養士養成課程におけるモデルコアカリキュラム（以下コアカリとする）において管理栄養士に必要な知識、技術に加え、対人業務の基本的な能力であるコミュニケーション能力を養うことに重点がおかれるようになった。

管理栄養士同様、医療に携わる医師・歯科医師・看護師・鍼灸師においても、近年コミュニケーション能力の向上に向けた教育を重要視している。さらに、医療分野に限らず、一般の大学生においても必要不可欠な能力として指摘されている。しかし、コミュニケーション能力向上に有効となる方法の効果が検証された研究は少ない。

そこで、管理栄養士に必要とされるコミュニケーション能力向上の方法として構成的グループエンカウンター（SGE：Structured Group Encounter）の導入を提案する。SGEは自己発見・自己成長を図るものであり人間関係が作りやすく、少数から多人数に対しても実施することが可能である。また、目的に応じて多種のエクササイズを組み合わせて実践することが可能であり、決められた時間内で実施できることから、コミュニケーション能力の向上、さらには人間的成長も期待される。

本研究では、コミュニケーション能力のトレーニング方法にSGEを導入し、その効果を検証するための尺度開発と効果測定を行なった。研究1では、管理栄養士となる学生に必要なコミュニケーション能力測定のための尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討した。研究2では、SGEを活用した管理栄養士となる学生のコミュニケーション能力と技法の修得効果について検証した。

2. 研究方法

研究1 管理栄養士養成施設の大学生を対象に3回の調査を実施し、尺度の開発、信頼性・妥当性を検証した。

調査1：（予備調査）管理栄養士養成A大学1・3・4年生298名を対象に44項目のコミュニケーション能力評価尺度を実施し、尺度項目の抽出と信頼性・妥当性の検討をした。

調査2：（本調査）調査1同様A大学1・3・4年生145名を対象に調査1で使用した尺度、および上野玲子が開発した「コミュニケーション技術評価スケール」を実施し、再検査法による信頼性（安定性）の確認と上野の尺度との併存的妥当性について検証した。

調査3：管理栄養士養成A大学とB大学、計189名を対象とし、調査2で作成した尺度にコアカリに準じた5項目を追加した尺度、および上野の尺度を実施し、調査2と同様に、再検査法による信頼性（安定性）の確認と併存的妥当性の検証を行った。

研究2 栄養教育の授業にSGEを導入した、コミュニケーション能力の効果について、研究1で作成した尺度を使用し測定した。Pre, Post, Afterそれぞれの平均値を算出し、一要因の分散分析（被験者内計画）およびアンケート結果よりSGEの効果、実施方法について検証した。

3. 結果と考察

研究1

調査1：評価項目の精査および尺度の信頼性の確認を目的とした調査における分析結果より、2因子32項目の尺度が得られた。下位尺度の α 係数は、0.92と0.84で因子間相関は0.670と比較的強い

正の相関を示し、因子の信頼性（内的整合性）が認められた。内容的妥当性は、管理栄養士およびカウンセリングを専門とする教員において妥当性が確認された。

調査2：因子分析により2因子32項目の尺度が得られた。第1因子は22項目からなる「共感・同調」因子、第2因子は10項目からなる「かかわりスキル」因子と命名した。再検査法による信頼性（安定性）は相関係数0.853 ($p < 0.01$)、既存尺度との併存的妥当性は相関係数0.868 ($p < 0.01$) と有意な正の相関を示し、信頼性と妥当性が確認された。

調査3：調査2で信頼性、妥当性が確認された尺度に、5項目を追加した結果、2因子30項目の尺度が得られた。第1因子は20項目からなり、「共感・同調」因子、第2因子は10項目からなり、「かかわりスキル」因子であると認識できた。再検査法による信頼性は、相関係数0.846 ($p < 0.01$)、既存尺度との併存的妥当性は、相関係数0.680 ($p < 0.01$) と有意な正の相関を示し、信頼性と妥当性が確認された。「管理栄養士に必要とされるコミュニケーション能力評価尺度」は、評価尺度としての有用性を確認することができた。

研究2

栄養教育実習受講者に、3回のSGEを実施し、研究1で作成した尺度によりPre, Post, Afterにおける効果測定の結果、尺度全体で0.1%、ペアごとのPreとPostで0.1%、PreとAfterにおいては1%水準で有意な差が認められた。因子別では因子1で5%、因子2では0.1%水準で有意な差が認められ、特に因子2「かかわりスキル」因子においてSGEの効果が大きいことが確認された。これは、今回実施したエクササイズの目的が因子2の項目に多く含まれていたことが有意に影響したと考えられる。

フェイスシートに記された対人コミュニケーションの得意・不得意別では、「どちらでもない・得意ではない」と答えた学生に有意な差が認められ、効果が確認できた。得意ではない学生18名を抽出した分析結果では、平均点は上昇していたが統計的な有意差はPreとPostにのみ5%水準で認められた。また、Preで得意ではないと答えた学生18名のうち10名の学生が、PostとAfterでどちらでもないに変化したことから、ゆっくりと継続的に定着しつつあることが覗えた。

クラス別では、Aクラスで5%、Bクラスでは1%水準で両クラスにおいて有意な差が認められた。性別による分析では、男性で5%、女性では1%水

準で有意な差が認められ、効果が確認できた。

また、Afterで実施したアンケート結果から、「コミュニケーション能力向上に役立たせるために、SGEの体験は有効である」との回答は76.4%であった。自由記述においては、「人見知りなので、人と接する機会があつてよかった」や「まだ上手にはできないが、意識してやっていきたい」などSGEの有効性が確認できる記述が多くみられた。

4. まとめと今後の課題

研究1では、管理栄養士に必要とされるコミュニケーション能力を評価するための尺度の信頼性と妥当性を検討した結果、20項目からなる「共感・同調」因子、10項目からなる「かかわりスキル」因子の2因子30項目からなる尺度が得られ、信頼性・妥当性が確認された。今後は、さらなる項目の精査と、調査対象人数および対象施設を増やし、尺度の信頼性・妥当性の検証を継続していく必要性が考えられる。

研究2では、SGEによる体験的学習がコミュニケーション能力向上に与える効果を検証した結果、尺度全体で0.1%水準で有意な差が認められた。特に「かかわりスキル」因子で大きな効果が認められた。コミュニケーションの得意別では、どちらでもない学生に大きな効果が確認でき、不得意な学生にもPreとAfterにおいて5%水準で効果が確認できた。アンケート調査では「コミュニケーション能力向上に役立たせるために、SGEの体験は有効である」との回答は76.4%であり、SGEの効果が確認できた。今後は、「共感・同調」因子の効果を高めるエクササイズの選定や、Afterにおいても効果の継続的な定着をはかれるような、SGEの回数・内容・順番などの工夫が課題とされる。

主要参考文献（著書、学術雑誌）

- [1] 特定非営利活動法人日本栄養改善学会理事会(2009)「管理栄養士養成課程におけるモデルコアカリキュラム」の提案, 栄養学雑誌, 67(4), 202-232
- [2] 上野玲子(2004) コミュニケーション技術評価スケールの開発とその信頼性・妥当性の検討, 日本看護学教育学会誌, 14(1), 1-12
- [3] 國分康孝, 國分久子(2004) 構成的グループエンカウンター事典, 図書文化, 14-21

中国のナショナリズム —日本へのメッセージ—

Chinese Nationalism:
A Message to Japan

平山 桐香
Kirika Hirayama

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード：中国ナショナリズム，日本，「西化」，「現代化」，普遍的価値

Key words : Chinese nationalism, Japan, Westernization, modernization, universal values

1. 研究目的, 研究方法, 内容など

「ナショナリズム」とは、一体何か。この問いに、明確に答えることが出来る人がいるだろうか。「ナショナリズム」という現象の問いは、ナショナリズム論のもっとも重要な論点の一つであり、その定義は非常に難解である。

この論文の研究目的は、中国ナショナリズムの生成と転化のプロセスを、清末以降から現在に至るまでの4段階に分け、歴史的叙述と論証を加えることである。特に在来の日本での研究であまり重視されない近代中国における「西化」と「現代化」の違いを示すことにより、中国ナショナリズムの特質やその歴史的意味を明らかにしていくことを目指すものである。

さらに日本の近代との関わりを通じて中国ナショナリズムの形成と日本との関係を解明してみたい。とくにこうした中国ナショナリズムが今日の日本にどのようなメッセージを発しているのか、そして日本人はそのメッセージを正しく理解しているのかどうかを考察してみる。

中国ナショナリズムを論ずる場合、日本の影響を過大評価してはいけないが、日本との対照比較という視座を避けて通ることも、中国ナショナリズム研究における正しい姿勢だとはいえない。したがって拙論では、敢えて「日本」という一側面にもスポットを当て、また、中国ナショナリズムの再定義から見る日中間の今後をも合わせて展望してみたのである。

2. 研究の結果, 目的の達成状況など

本論文では、中国ナショナリズムの歴史を振り返ることにより、近代中国のナショナリズムのあり方と特徴を明らかにし、中国のナショナリズムと緊密な関係性を有する日本も中国とともに一国だけのナショナリズムから脱出し、世界に通用する「普遍的価値」の構築に貢献する可能性についても思索を巡らせ、今後のさらなる研究に弾みをつけた。20世紀の中国における、中国ナショナリズム形成にとって、日本の果たした役割が非常に大きかった。中国ナショナリズムは日清戦争、帝国主義日本の侵略に抵抗するなかで強固なものになっていき、その限りでは、抵抗のナショナリズムは、プラスの価値をもっていると評価できるであろう。つまり日本、列強、ひいては政府への抵抗こそが、「西化」さらには、「現代化」の促進を促し、民主化の議論を活発化させ、90年代では中国を大国まで押し上げた原動力であったといえる。しかし、昨今の反日ナショナリズムには、ただ「抵抗」というものとは違う様相をも持っている。それをどう理解し受け止めるのか、その新たな「現代化」の動きを通じて「普遍的価値」を見出すかどうかについて思考することは、もはや、中国人ではなく、世界のすべての人々に課せられた使命感な気がしてならない。

今日の日中間の関係は、いままで相互依存を必要とする経済協力が主だったが、今や単なる経済問題に留まらず、同時に政治、法律、社会、文化、歴史的記憶など各方面において協調を必要としている。そこには、共通の、もしくは少なくとも相互排他的でない共同意識の確立が重要なのである。両国関係はもはや二国間だけでなく、経済の迅速な発展と各国の頻繁な交

流に伴って、各国における経済上の相互連携が深まり、各地域におけるナショナリズムも高まりを見せつつあるため、東アジア全体のアイデンティティ問題も、いまや議題に上がるようになってきている。もちろん、東アジアの主要国家である日本と中国は、この地域のアイデンティティの形成と具体的内容に大きな影響を及ぼすのはいうまでもないことである。

しかし現実には甘くない。両国関係を阻害する不利の要素や障害が多く、話し合いの推進が困難になっている。中でも、最も大きな壁として立ち上がるのが、心理や感情の相違、つまりはナショナリズムがもたらす敵意である。その解決こそが、今後の日中関係を維持する上に、さらには東アジア地域をひとつにまとめ、深化するために最も重要になるだろうと考えられる。

その意味では、本研究はまだまだ発展途上であり、ひとつのステップとして積み上げるべきものである。

3. まとめと今後の課題

中国ナショナリズムの研究の総合的強化は、単なる思想分析能力の向上の問題ではない。しかし、一般的な思想史の角度から見れば、中国の時代ごとの特色や、ナショナリズム思想を内包する中国独自の観念、理念、信念、命題等について、さらなる注視と分析を加えることは、中国ナショナリズム研究の思想的水準を向上させる上では重要な課題であろう。

特に私の論文では、中国ナショナリズムを「日本」という側面だけに重点を置き論述したが、中国人の西洋言語による著述も、直接西洋に向けてナショナリズム感情を吐露し、弁護し、さらにはナショナリズム思想を説明したものがある。これらは総じて現在でも見落とされていることが多いが、近代中国ナショナリズムの特徴を認識する時、また中国ナショナリズムをさらに深化して理解する際に、必ずこれらについての研究も有益なものになるであろう。

そして、中国ナショナリズムを研究する際、民族的な心理や感情レベルにのみ留まって、ナショナリズムを過度に一般化する処理の仕方を避けると同時に、思想の内容や歴史上における実際の存在状態を深く追求なしに、論理的分析・分類を行

うことを避けなければならない。適度な感情、イデオロギー、さらには社会的実践を結合させて認識することが、中国ナショナリズムという歴史的現象の本来の要求であり、私たちの研究に対して高みと深化を要する方向でもある。

主要参考文献（著書、学術雑誌）

- [1]米原謙 金ボン珍 區建英著『東アジアのナショナリズムと近代 なぜ対立するのか』大阪大学出版会 2011年
- [2]岡部達味『日中関係の過去と将来 誤解を超えて』岩波書店 2006年
- [3]區建英「中国ナショナリズムの形成」新潟国際大学情報文化学部紀要 2009年
- [4]『从『西化』到现代化』北京大学出版社 1988年
- [5]星野昭吉編『世界政治の展開とグローバル・ガバナンスの現在』テイハン 2010年

大学生の自我同一性確立過程と時間的展望との関連 —女子大学における臨床心理士志望者への半構造化面接を通して—

Relationship Between Ego Identity Achievement Process and Time Perspective among University Students:
Semi-Structured Interview to Clinical Psychology Applicants in a Women's University

島崎 今日子

Kyoko Shimazaki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：時間的展望，自我同一性，職業選択，臨床心理士，青年期

Key words : time perspective, identity, vocational choice, clinical psychology (profession), adolescence

1. 問題と目的

本研究では、臨床心理士志望者の時間的展望と自我同一性確立との関連を調べる。

一般的に青年期後期は今まで獲得してきた自己を見直し再構成する時期と言われ、特に職業決定は青年が自己を見直す自我同一性探求の重要な契機となる(杉村, 2001)。この時期、青年は役割実験を通して自我同一性を形成する(岡本, 2000)。

臨床心理士について、河合(1995)は、「こころの専門家」を目指す以前になすべき課題として、自分はなぜ「こころの専門家」になりたいのかとあらためて問い、また自分自身の「こころ」の状態を理解する必要があると指摘した。大学院ではまさに自己の見直しが訓練課題となり役割実験となる。本研究で臨床心理士を取り上げたのは、臨床心理士志望者は自己理解に直面することにより、それだけ尖鋭に自我同一性確立に関わる諸問題が浮き彫りになる可能性を考えたからである。

都筑(1999)の指摘に従い、本研究では自我同一性の確立過程と時間的展望との関連を検討する。まず、時間的展望の編成過程は、「過去を引き受けること→未来へと向かおうとすること」(白井, 2001)、「動機づけ(将来への関心)→プランニング(将来の文脈においてプランを実現化させることへの関心)→評価(将来への関心が実現されると期待している程度)」(Nurmi, 1989)、「漠然とした将来→具体的、現実的な将来目標を設定→展望の転換という循環」(比嘉・岡本, 2007)、「欲求・動機→認知→感情・評価→目標達成への行動→フィードバック」(都筑, 1999)などと捉えられてきた。本研究では、職業選択過程の観点から、時間的展望を「職業選択に関わる自己理解と職業理解、およびその結果としての将来展望」と捉える。つまり、職業についての自己理解は、何に興

味を持ち何ができるかなど、過去の自分の振り返りである。職業理解は自分になろうとする職業についての理解で、自己理解と職業理解の両者を考慮に入れた上で、将来展望形成がなされる。更に、将来展望の形成後に両者が見直され、目標が再設定される。

自我同一性の確立と時間的展望との関連については、両者が相互に規定する関係にある(白井, 2003)、自我同一性達成と過去受容(野村・橋本, 2006; 大石・岡本, 2010)、現在・過去・未来の統合(都筑, 1993)という指摘がある。

目的 本研究では、時間的展望を「職業選択に関わる自己理解と職業理解、およびその結果としての将来展望」と捉え、臨床心理士養成の大学院受験に際しどのように自己理解し、職業理解をし、その上でどのような将来の目標設定をしたのか、大学院入学後に自己理解と職業理解がどのように深まり将来展望の再設定につながったのか、再設定された将来展望の認知・感情はどのようなものかなど、それらの関連性を検討する。また、時間的展望が自我同一性の確立過程にどのように影響を与えているかを検討する。その際、自我同一性については、職業的同一性に焦点を当てた。

2. 方法

都内大学に在籍する臨床心理学領域専攻の女子大学院生6名を対象に面接調査を行った。面接調査の内容は、固有名詞を伏せて逐語記録を作成した。文脈のまとまりごとに要約し、「大学院入学前」「大学院入学後」の出来事に分類し、さらに「自己理解」「職業理解」「将来展望」「将来に対する認知・感情」に分類した。その内容の類似性や相互関係などをKJ法(川喜田, 1967)に準じたやり方で整理・分類し、分析・解釈を行った。

3. 結果と考察

時間的展望の再編成 時間的展望の再編成につい

での検討から、以下のことが明らかになった。

表1. AとBの時間的展望

	入学前	入学後
自己理解	専門職に就きたい, 人助けをしたい	何もできない
職業理解	人を救える良い職業	人の役に立つことは難しい
将来展望	専門職, 会社を立ち上げたい	一人前になりたい, 臨床の分野に迷いがある

入学前は臨床心理士の仕事がよく理解できない状態での進路選択であったため, 仕事の難しさを将来展望の中に位置づけることができず, 「限定された展望」の段階(比嘉・岡本, 2007)であったと考えられる。そのため, 入学後は何もできない自分や人の役に立つことの難しさを知り, 自己理解の前提が崩れ, 将来に対する認知・感情も, 将来にも不安を感じていた。以上, 具体的な将来展望を形成するためには, 適切な職業理解, 自己理解が重要であることが分かる。しかし, 臨床心理士の職業理解は, 実習などの実際の体験を通して深まるため, 大学までの教育の中で理解を深めることが困難であることが示唆された。(表1)

表2. CとDの時間的展望

	入学前	入学後
自己理解	子どもが好き, 家族を理解したい	子どもが好き
職業理解	よく理解できない	子どものケアが大事, 仕事の特徴が理解できた
将来展望	企業あるいは病院で働く	将来がイメージできないが, 臨床の仕事への動機づけが強まった, 現場に出て経験を積んでから企業や病院で働きたい

入学後に自己理解や職業理解が深まり, 現実に直面しても, それを自己の将来展望の中に位置づけることで, 将来展望を実現させるまでの具体的な計画がつくられ, 将来展望はより具体的になっていた。以上, 入学前の将来展望が具体的であるとそれを深める形で学習が進み, その学習がより将来展望を具体化させることが示唆された。(表2)

表3. EとFの時間的展望

	入学前	入学後
自己理解	友達関係の悩みがある	何もできない
職業理解	よく理解できない, 人を救える良い職業	人の役に立つことは難しい
将来展望	スクールカウンセラーなど	臨床心理士に迷いがある(E) 病院に勤めたい(F)

入学後の大学院での学習で, 何もできない自分や人の役に立つことの難しさを体験した。しかし, 一人は「人の内界を理解し関わることが, 面白いし楽しい」と学習を体験した場合, 将来展望が具

体化した。以上, 大学院での学習の中で自己理解や職業理解を肯定的に深める体験をすることが時間的展望の構築にとって重要と考えられる。(表3)

つまり, 入学前の時間的展望が適切な自己理解と職業理解に基づく必要があるだけでなく, 入学後, ①理解の深まりをどのように捉えているかという認知と, ②その理解を将来展望の中にどう位置づけ, 将来展望を再構築できるかということが重要であることが示唆された。これは, 「展望の転換という循環」(比嘉・岡本, 2007)「フィードバック」(都筑, 1999)の重要性と符合するものである。**自我同一性の確立と時間的展望との関連** 入学前の自己理解で「子どもが好きだ」などの具体的な関心があると, 大学院での学習に積極的に関与しより学習に意義を見出し, 自我同一性の確立を推進し, その結果, さらに時間的展望の深まりにつながる傾向が見られ, 両者の相互規定性(白井, 2003)が支持された。

一方, 自我同一性の確立には, 過去の体験を 수용し人生に統合することが重要であること(野村・橋本, 2006; 大石・岡本, 2010)が本研究においても示された。さらに, 挫折体験だけではなく, 興味や関心といった肯定的な体験を人生に統合してゆくことも重要と考えられ, 都筑(1993)の過去・現在・未来の統合が支持されたと言える。

また, 役割実験が必ずしも自我同一性の確立につながる(岡本, 2000)とは限らず, 役割実験を通して自己理解や職業理解が深まったために, 自我同一性に危機が起こる場合もあることが示唆された。自我同一性の確立にとって, 役割実験を通して自己理解や職業理解を深めるだけでなく, それを充実した体験と捉えていることが重要であった。

4. 今後の課題

今後は対象人数を増やした検討や量的分析も求められる。また, 縦断的な研究により, 過去の時間的展望の構造と現在の時間的展望の構造を比較検討する必要がある。

主要参考文献

- [1]比嘉麻美子・岡本祐子 (2007). 信頼感を基盤とした青年の未来展望形成プロセス 広島大学心理学研究, 7, 227-243.
- [2]白井利明 (2001). <希望>の心理学—時間的展望をどうもつか— 講談社現代新書
- [3]都筑学 (1999). 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部

食糧廃棄物削減に繋がる行動を促す食育の展開 —環境教育的視点からの検証—

稲木 瑞来

Mizuki Inagi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修

キーワード：食糧廃棄物，環境教育，食育，体験的な活動

1. 研究目的

食は人間が生きていく上で基本的な営みの1つであり、健康的な生活を送るためには健全な食生活は欠かせないものである。しかしながら、近年、食生活を取り巻く社会環境の変化などに伴い、子どもの食生活の乱れや健康に関して懸念される事項、例えば、朝食欠食などの食生活の乱れ、肥満傾向の増大、過度の痩身などが見られる。また、増大しつつある生活習慣病と食生活の関係も指摘されており、望ましい食習慣の形成は、国民的課題となっている。

一方、日本の現状として、食料自給率は先進国で最低の数値（39%）であり、多くの食料を輸入に頼っている。さらに、食品を輸入することによって生じる「フード・マイレージ」や「仮想水」など、地球環境への負荷も問題点として考えられる。世界の食料需給は人口増加や経済発展により、不安定な状況であるため、日本は食料自給率を上げて食料供給を安定させるとともに、食品・食材を無駄なく大切に使うべきである。しかしながら、一般家庭から排出される生ごみのうち、食べ残しは全体の約4割を占め、さらにその半分以上が手付かずの食品という現状もある。今後、日本の食糧廃棄物をさらに増加させないためにも早急に対策が必要であると考えられる。

子どもの頃に身に付いた食習慣を大人になって改めることは、困難なことである。そのため、2005年には「食育基本法」が施行され、その前文においても「食育を、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置づける…」と記されている（図1）。

特に成長期の子どもたちに対する「食育」で最終的にめざすものは、人として大切なこと、つまり「命の大切さ」を理解させることである。

さらに日本の学校教育では、2002年度より「総合的な学習の時間」が開始された。学習指導要領では、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題について複数の分野が例示されており、その中でも特に「環境」について重要視されている。近年の学校教育において「環境教育」と「食育」が注目され始め、「食農教育」が一緒に動き始めている。

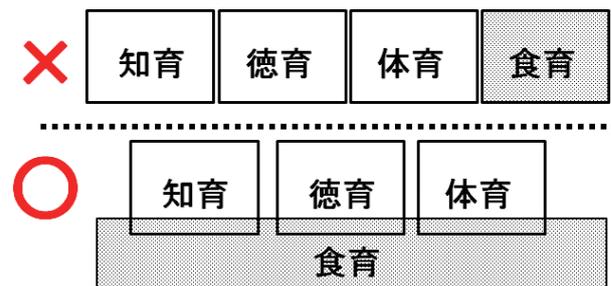


図1：食育は「知育・徳育・体育」の基礎^[1]

成長期の子どもへの食育は、健やかに生きるための基礎を培うことを目的としていることから、環境教育の基礎となる自然体験を通して「食」や「命」の大切さを学ぶことができるはずである。

「環境教育」と「食育」の分野では、「食育」と「体験的な学習」を合わせた「食農教育」について、環境教育の視点からの研究（野村，2004・山下，2004・小坂，2004など）があるが、食育の分野ではあまり触れられていない。また、食農教育が子どもに与える影響について述べられている研究は見当たらなかった。

学校教育においては、総合的な学習の時間の中で食農教育が実践されることが増えてきているが、「環境教育」と「食育」の繋がりが無意識に取り組みされていることが多い。

そこで本論文においては、児童期における「環境教育」と「食育」を結びつけ、食糧廃棄物削減に繋がる食育の方法を探ることを目的とした。まず「環境教育」と「食育」の関連性を明らかにし、現在行われている「食育」に「環境教育的視点」を取り込むことの可能性と方法を検証した。そして、子どもたちが「環境」と「食」に関わる体験的な活動を通して、「自然との共生」や「命の大切さ」を学び、気づきや行動の変化に繋がる要素や条件を明らかにした。

2. 研究方法

本研究は、文献収集とインターネットの情報に加え、実地調査に出向き参加者を対象としたアンケート調査・ヒアリング調査を行った。一部、主催者にアンケートを依頼し、回答を集計する方法を取った。実地調査地は、①兵庫県下公立小学校で行われている環境体験事業を支援する「明石のはらくらぶ」、②幼児・児童の親子を対象とした食農体験を行う「食育ファームin大原」である。さらに、教育委員会、栄養教諭、校長・教諭との対話をもとに、教育的視点からの検証を行った。

3. 研究の結果

現在行われている食育の基本目標は「生命の糧」「生命の尊さ」「自然との共生」など、「食と生命の基本的な価値を認識すること」である。食育では、生活体験や体験学習を中心に進めることが有効であり、総合的な学習の時間や給食など、他教科との関連が必須となる^[2]。しかしながら、現在小学校で行われている食育においては、「体験的な学習」や「生命の価値を認識する内容」がほとんど行われていないことが明らかとなった。

今日では日本のみならず世界の多くの国々で、子どもたちの自然体験や生活体験が減少している。そこで「総合的な学習の時間」の導入により、学校教育においても「環境教育」の浸透が期待されており、幼少期、学齢期、成人期と発達段階に応じた直接体験や感性学習を行うことで、自然と社会の仕組みや自然との共生、命の大切さを学ぶことができる^[3]とされている。

日本は食料自給率の低下によって、日常生活において農業者を見る機会が減り、自分で作物を栽培する機会も減ってきている。このことが、食糧廃棄物を増加させていると考えられる^[4]。そのため、今日取り組まれている「食農教育」が、食べ

ものへの「感謝の心」を大切に作る習慣を身に付けることに効果的であり、食糧廃棄物削減に繋がるのである。

つまり「環境教育」と「食育」の分野は、「作物を栽培・収穫する体験的な活動」を通して、「自然との共生」や「命の大切さ」学ぶ点で重なり合う部分が多い(図2)。

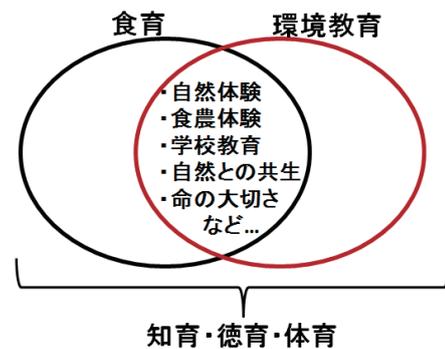


図2：環境教育と食育の接点

実地調査の結果から、子どもの興味・関心や行動変化は、体験的な活動を行うことで、より効果的になることが明らかとなった。そのため、自然体験や食農体験などを通して知識を付け、態度や意識が変わり、自然や生命に対する行動が変化することが期待できる。

4. まとめと今後の課題

食育は、食を通して人と人との関わり方を見直すだけでなく、人と自然の繋がりを理解することが重要である。イベント型の授業ではなく、継続性、発展性があり、子どもたちの行動に結びつく質の高い食育が理想である。そのためには、食に関する体験的な活動を中心に、作物を育てることを通して、生きることの大切さや育てることの難しさ、作物を作る人への感謝の心、収穫の喜びを自ら感じる学習が必要である。

主要参考文献(著書、学術雑誌)

- [1]小川雄二・中田典子(2011)『五感イキイキ!心と体を育てる食育』新日本出版社, 14頁。
- [2]大村省吾・川端晶子(2005)『食教育論 豊かな食を育てる』昭和堂, 19-24, 280-283頁。
- [3]環境教育学会(2012)『環境教育』教育出版, 1-2, 4-5, 174, 176頁。
- [4]野田知子(2009)『実証食農体験という場の力 食意識と生命認識の形成』農文協, 21-24, 49頁。

過剰適応のスクリーニングテスト開発に向けた基礎的研究 —バウムテストにおける描画特徴の検討—

A Fundamental Study toward Developing a Screening Test of Over-Adaptation:
Examination of Drawing Features in a Baum Test

富田 圭美

Yoshimi Tomita

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：過剰適応，よい子，バウムテスト，全体印象，身体症状

Key words : over-adaptation, 'good child', Baum tests, overall impression, somatic symptoms

1. 問題と目的

心理臨床の世界においては、周囲から「よい子」と評されていた子どもたちが、後に不適応に陥ってしまう例が知られている。これについて、近年、「過剰適応」という概念で研究がなされてきている。しかし、うまく適応しているよい子も過剰適応の「よい子」も、外見的には適応が良好であり、両者を見分けることは困難であると言われている。そのため、この二つのよい子を弁別できるようなスクリーニングテストを考案していくことが、「よい子」の不適応を予防する上で重要なのではないかと考えられる。

過剰適応を測定するものとしては、複数の過剰適応尺度が作成されているが、尺度による抽出方法には、自身の過剰適応に対してある程度自覚的な生徒しか抽出できないことや、生徒が回答を意識的に操作できるなどの問題点がある。そのため、過剰適応をスクリーニングするためには、意識的な操作が行いにくく、無意識を映すとされている投映法を用いることが有効であると考えられる。

過剰適応の生徒に投映法を用いた研究としては、バウムテストを用い、過剰適応の生徒の描画特徴を検討した柏原（2008）の研究がある。バウムテストとは、A4版の白画用紙に鉛筆で「実のなる木を」描くという簡便な描画法である。バウムテストは、Karl Kochが人格テストとして体系化したものであり、個人のパーソナリティ全体をすばやく概観できる（Bolander, 1977 高橋訳 1999）、誠に優れた方法である。過剰適応の生徒がどのように生きているかというその全体像を捉えるためには、バウムを描いてもらうことが役に立つであろう。

柏原（2008）は、過剰適応傾向の高い生徒のバウムにおいて、樹冠と幹が接合しており、樹冠内

枝が無く、樹皮に傷・印が描かれるといった特徴を見出したが、過剰適応尺度の問題点や、症状面など別角度からのアプローチにより過剰適応を自覚していない生徒について検討すること、バウムの全体印象を検討することなどの課題が残った。

そこで、本研究では、柏原（2008）を下地とし、過剰適応のスクリーニングテスト開発に向けた基礎的研究として、以下の二点について検討することとする。まず、中学生における過剰適応について、身体症状という視点も含め、その実態を明らかにすることを第一の目的とする。そして、バウムテストにおける全体印象の検討と個別事例検討から過剰適応の生徒の描画特徴を浮かび上げさせ、スクリーニングの可能性について探求することを第二の目的とする。

2. 方法

【研究1】中学生の過剰適応の実態についての検討

2012年9月上旬～下旬に首都圏の公立中学校A校の1年生～3年生計340名と、B校の1年生248名の計588名を対象に、質問紙調査を実施した。質問紙の内容は①バウム描画用紙、②身体症状尺度（筆者作成）、③青年期前期用過剰適応尺度（石津, 2006）、④フェイスシートであった。

【研究2】バウムの全体印象の検討

研究1の調査で得られたデータを基に、有効回答者全体と1年生全体について、それぞれ過剰適応尺度得点高群のうち身体症状尺度得点上位10名を過剰適応群とし、過剰適応尺度得点中群のうち身体症状尺度得点が平均値前後10名を一般群として、過剰適応群と一般群のバウムを抽出した。また、1年生女子、男子においては各群5名ずつのバウムを抽出した。これらのバウム計35枚を、本研究で作成した印象評定尺度に従い、臨床心理士6名が評定した。

【研究3】バウムの個別検討

1年生の過剰適応群のバウム3例を取り上げ、筆者が個別に描画特徴を検討した。次に、筆者が身体症状の多さやバウムの特徴を手がかりに、過剰適応尺度得点が中群に属する1年生189名を個別に検討した。

3. 結果と考察

全回答者588名のうち、計460名が有効回答者となった。過剰適応尺度の因子分析（主因子法、プロマックス回転）の結果、「自己抑制」、「他者配慮」、「自己不全感」、「人からよく思われたい欲求」の4因子が見出され、信頼性分析の結果、全て $\alpha = .79$ 以上と十分な値が示された。

過剰適応尺度得点と因子得点について分散分析を行った結果、「他者配慮」における学年の主効果 ($F(2, 270) = 3.30, p < .05$) と交互作用 ($F(2, 270) = 3.74, p < .05$) が有意であった。単純主効果検定を行ったところ、男子における学年の単純主効果 ($F(2, 270) = 5.08, p < .01$) が有意であったため、学年についてBonferroni法による多重比較を行った結果、1年生男子の方が2年生男子よりも「他者配慮」が有意に ($p < .01$) 高かった。また、「自己抑制」と「自己不全感」においては性別の主効果（順に $F(1, 270) = 4.13, p < .05, F(1, 270) = 7.39, p < .01$) が有意であり、女子の方が男子よりも「自己抑制」と「自己不全感」が高かった。過剰適応尺度得点と「人からよく思われたい欲求」においては有意な差は見られなかった。

次に、各学校の過剰適応尺度得点と各因子得点について対応のない平均値の差の検定を行った。その結果、首都圏周辺部に位置するA校に比べ、より都心近郊に位置するB校の方が「自己抑制」が有意に高く ($t(268) = 2.01, p < .05$)、過剰適応尺度得点とその他の因子得点には有意な差が見られなかった。これらのことから、過剰適応の程度は、学年や性別、学校に関係なく同じだが、過剰適応を因子ごとに細かく見ていくと、学年や性別、学校によって差が見られることが明らかになった。

そして、身体症状尺度得点について、過剰適応尺度得点における群を要因とした分散分析を行った。その結果、群の主効果 ($F(2, 457) = 24.3, p < .001$) が有意であったため、TukeyのHSD法による多重比較を行った結果、3群すべての平均値に有意な差 ($p < .01$) が見られた（低群 < 中群 < 高群）。このことから、過剰適応尺度得点が高い群ほど身体症状を多く生じていることが明らかに

なった。

研究2では、過剰適応群と一般群の印象評定尺度の各項目について対応のない平均値の差の検定を行った。その結果、9つの項目において有意な差が見られ、過剰適応群のバウムの全体印象の特徴として、「激しい」「勢いのある」「濃い」というエネルギー感の高さや、「険しい」「苦しそうな」「暗い」「恐い」「濃い」という緊張度の高さ、「奇異な」「バランスの悪い」という形態の統制の悪さが捉えられた。したがって、生徒の過剰適応を検討する際には、このような3つの点を注意深く検討することが重要であると言える。

研究3では、研究2で得られた特徴が過剰適応群のバウムにおおよその傾向として当てはまっていたが、必ずしも全てのバウムに当てはまるわけではないことが理解された。個別指標については、不自然な木の立ち方や落ちた実、激しい運筆、影の表現などから、適応のための努力をしているものの、内的適応が上手くいかなくなっているという状態が捉えられた。そして、1年生において過剰適応の要素があると思われる生徒が10名見出された。これらの生徒を特定することは今回の研究では行わなかったものの、過剰適応に無自覚である生徒であるとの予想を持ち、バウムの特徴を十分に検討していくことが必要であろう。

4. 今後の課題

今後の課題として、印象評定項目を再検討することや、2、3年生の描いたバウムの全体印象を学年ごとに検討すること、個別指標をより詳細に検討することなどが挙げられる。また、教育現場において有効と思われる方策を具体的に提示していくことも視野に入れ、今後の研究を深めていきたい。

主要引用・参考文献

- [1] 柏原博子 (2008). 過剰適応の子どもにおける研究——投影法のスクリーニング可能性 首都大学東京東京都立大学心理学研究, 18, 29–35.
- [2] Koch, K. (1957). *Der Baumtest. 3. Auflage——Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. Bern: Verlag Hans Huber. (コッホ, K. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト 第3版——心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究 誠信書房)

和服着用における着くずれについて

Measures to Prevent Distortion in the Wearing of Kimono

永島 優香

Yuka Nagashima

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修

キーワード：和服，着くずれ，腰紐

Key words : *kimono*, *distortion*, *koshi-himo*

1. 研究目的

今日の若い世代には、日本の伝統文化である和服は、特別な時に着る衣服という考えが一般的なイメージとして浸透している。

山口ら¹⁾の研究によると、現代の若者は和服を着用しないが、実は和服に対して興味や憧れといった肯定的な意識をもっている。着物を着るにあたって着心地や着くずれといった様々な障害により着物を着ることが難しい現状にあるのではないかと、とらえている。しかし、それ以上に「和服」に対する偏見は強く、「着付けが難しそう」などの固定概念が若い世代では強いようである。そこで本研究では、このような和服離れの現状を鑑みて、和服に対する若者の考え方を改善させるべく、和服と着くずれについての研究を行うことにした。

これまでに多くの研究者が和服の着装と着くずれや、型くずれについて検討されている。また、和服の着装においては腰紐の扱いが最も重要であるとされながら、未だ着くずれと「腰紐」に注目した研究は見当たらない。本研究では、和服の着くずれと腰紐がどのように関わっているのかを検討することで、着くずれしにくい腰紐の結ぶ位置を見出し、若い女性ができるだけ着くずれを起こさずに和服を楽しめるようになることを目的とした。

2. 研究方法

本研究を取り組むにあたって、まずは若者の和服離れの原因を明確にするため、若者らの和服に対する意識について調査した。その後、若者の和服離れの1つの要因である和服の着くずれについての先行研究を調査した。

次に、和服の着装時に腰紐がどれほど重要視されているのか、そしてもっとも一般的な腰紐の扱い方法を明らかにするために着装専門書を用いた調査と、和服の着装指導者および着装を勉強して

いる女性を対象に、腰紐の結び方についての聞き取り調査を行った。

最後に、着物地としては布地が柔らかく着装が難しいとされる絹縮緬地によって構成された大裁女物あわせ長着を用いた着用実験を行った。この実験結果を通して、着くずれ量の測定を行い、腰紐の扱いにおける問題について検討した。一般的な腰紐の結び方であると判明した「腰骨から2cmから3cm上の位置」で締める方法と、予備実験の結果、着装専門書の調査によって分類された4通りの腰紐の結び方のなかで、もっとも着くずれが少なかった結び方である「腰骨の真上を通り、背面は第4腸骨を通る位置」を用いて、それぞれ同じ動作サイクルで着装実験を行った。

2-1 試料

(1) 大裁女物あわせ長着

本研究で使用した和服地は絹縮緬地である。この縮緬地は、成人式などに着用する振袖をはじめとして外出着や礼服としての布地として、最も多く用いられる和服地である。また、布地としてはその布の扱いが難しく、着装においても着くずれが起りやすい布地であるとされる。

(2) 腰紐

絞めやすい、馴染みが良いなどの特徴をもち、一般的にもっとも多く使用されているモスリン製の腰紐を供試した。

2-2 マーク付け

測定誤差を最小限にするため、長着と紐にマーク付けを行い、着装の際に毎回マークが合うよう実験を行った。

(1) 長着

上前身頃・後ろ身頃・上前衿に10cm四方にマア付けを行い、実験に供した。

(2) 腰紐

腰紐には、締め具合を一定にするため、両脇

でとる襷の位置、すそ線の位置、腰紐の合わせ目には合印をつけ毎回の着用実験を行った。

3. 研究結果と考察

3-1 関連研究について

(1) 和服に対する若者の意識と実用性に関する研究

文献調査より、若者は、古くから受け継がれている和服に対して高い好感度を示していることが判明した。また、和服は魅力的で上品であるというイメージも強いことも明らかとなった。和服は女性らしいというイメージもあり、着用願望も高いため、和服に対して憧れのような感情を抱いている若者も多いことが推測される。

若者の和服の実用性についての見解は、着装が難しいと感じている割合が非常に多かった。和服を着用したくても一人で和服を着ることができない者が多いこと、着装後に着くずれが起きてしまうこと、この2点の要因が和服を着用する機会を減少させていると考えられる。

(2) 着くずれに関する研究

山口、堀田、鬘谷ら^{2)~4)}の文献調査から和服の素材、サイズ、和服着用時の動作が、着くずれに影響を与える重要な要因であることが判明した。しかし、下半身の和服の着くずれは腰紐の扱いによって決まるといっても過言ではないものの、文献調査を行った範囲では、紐の扱い方について明確にされたものは見られなかった。

3-2 着装専門書による調査

(1) 腰紐に対する着装専門書の見解

60年代から90年代にかけて、腰紐の扱い方について詳しく記載されたものは少ない。しかし、現代に近づくにつれ、詳しく記載される傾向にあり、着装の際に腰紐の扱い方が重要視されてきていることが判明した。

(2) 腰紐の位置

各着装専門書に掲載されている腰紐の通る位置に着目して分類したところ、大きく分けて4通りに分類することができた。そのうち、「腰骨から2cmから3cmくらい上」に腰紐を結ぶと記載されている書籍がもっとも多く、この位置が一般的な方法であることが明らかとされた。

3-3 専門家による聞き取り調査結果

この調査から、和服に着慣れた人の場合では、腰紐自体の引き締め方は弱く、強く締めていないにもかかわらず、長時間着用していても着崩れは起りにくいことがわかった。和服に着慣れていない人では紐の扱いや結び方が難しく、着装くずれが起りやすい。この腰紐を克服することこそが

美しい着装を決定するものと考察された。

3-4 着装実験

一般的な結び方で行った実験では、行動サイクルの動作直後から着くずれが発生した。実験後には裾が開き、裾広がりとなり、後ろ裾が床に付くほど下降するなど、明らかな着くずれが確認できた。一方、着くずれしにくいとされる腰紐の結び方で行った着装実験では、目視で確認できる着くずれはほとんど起こらなかった。これは、腰紐を後ろ上がりになるように結ぶこと（前下がり）で、体の動作に合い、腰紐に余計な負担がかからなかったためだと考えられる。同時に、腸骨の上部を通る位置に紐を結ぶことで、より腰紐が安定したと考えられる。

また、最も着くずれを起こす動作は正座であった。座るといふ動作は着物地を圧迫し押しつけてしまうことが原因であると考えられる。また、写真観察による評価から、和服の下半身の着装において、背面の裾が最も着くずれやすいことが分かった。体を前に倒す動作をする際に、着物地が体の動きにあわせて引っ張られるため、腰紐が何らかの原因で緩むと、着くずれが起こると考えられる。

4. まとめ

第1に和服の裾の着くずれは腰紐の結ぶ位置と方法が大きく影響していることが明らかとなった。第2に着くずれは紐と長着の間に隙間が生じることで起こるため、腰に紐を固定する事で着くずれを防ぐことができる。第3に腰紐を結ぶ位置は、腸骨の真上をとおり、背面は第4腸骨を通る位置で腰紐を結ぶと着くずれは生じにくい。

主要参考文献

- 1) 近藤信子, 富氣久江:「女子学生の和服に対する意識—1990年調査と2007年調査の比較—」, 中国学園紀要7, p13~19(2008-06)
- 2) 山口直子, 伊藤瑞香, 内田彩子, 鈴木ちひろ, 鬘谷要:「和服の着崩れにおける素材の影響とそのメカニズムについて」, 和洋女大紀要52, p1~12(2012)
- 3) 堀田延子, 林智子, 広瀬明美, 池永障作:「複合布としての和服地—2, 3の消費性能について—」, 平安女大短期大学紀要18, p54~63(1987)
- 4) 鬘谷要, 出山悦代, 小平志乃, 中村洋子, 羽生京子:「平面構成学分野における着崩れの定量化法の検討」, 和洋女大紀要 家政系編44, p1~10(2004)

井原西鶴 町人物の研究

The Merchant Novels by Saikaku Ihara

吉村 桃実

Momomi Yoshimura

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：井原西鶴，町人物，元手，豪商，下級商人，日本永代蔵，世間胸算用，町人

Key words : Saikaku Ihara, merchant novels, funds, merchant princes, lower social strata merchants, *Seiken Munesanyou*, townsfolk

1. 研究目的

貞享五年（一六八八）に刊行された『日本永代蔵』は、井原西鶴の浮世草子で「町人物」と称される内の第一作目の作品である。この作品は「大福新長者教」という副題の通り、致富道の教訓を含んだ成功譚・没落譚が収録されており、描かれている対象は豪商が主である。この作品では、目録と副題に各話に登場する主人公が示されている。また六巻各五章の計三十話のほとんどの話は、目録とその副題の示す人物（主人公）が一致していると考えられる。しかし、目録と副題が示す人物が異なる話がこの作品中には十話存在する。ここでは、先行研究であまり触れられていないが主人公と思われる人物とその他の人物を目録と副題に記した話を分類すると共に、その共通点を探っていく。また、全三十話のそれぞれの主人公の元手から、町人にとっての元手の重要性や主人公の性格や人間性を改めて探っていく。次に扱ったのは、元禄五年（一六九二）刊行された「町人物」と称される内の第二作目『世間胸算用』である。こちらは『日本永代蔵』とは対照的に、描かれた対象が下級商人の生活だ。この作品も並行して研究対象とすることで、『日本永代蔵』と『世間胸算用』の執筆において西鶴が何に重きを置いたのかを考察していく。

2. 研究方法、内容など

『日本永代蔵』は「親よりのゆづりなくては、すぐれて富貴にはなりがたし」（巻六の二）と元手の重要性を語っている。その一方「親のゆづりをうけず、その身才覚にしてかせぎ出し、銀五百貫目よりして、これを分限といへり。千貫目のうへを長者とはいふなり」（巻一の一）とも説いている。町人は一代で分限となり成功することが理想的である。しかしながら、「人間万事金の世の

中」、「先立つものは金」。元となる金銀が無ければ、商売を上手くやっていけないのもまた現実だ。本稿では、『日本永代蔵』全三十話に登場する主人公を三種類に分類し、それぞれの元手の獲得方法・町人にとっての元手の重要性から主人公の人間性等を分析することを目的とした。尚、この分類は①元手がある主人公、②元手がない主人公、③その他の話という三種類で行った。

『世間胸算用』では、作中によく使用されている単語があることに着目した。これらの単語を①『日本永代蔵』でも使用されている単語、②『世間胸算用』を中心に使用されている単語の二種類に分類し、それぞれの作品における意味の違いを考察していくこととする。

3. 各章のまとめ

第一章「作者・井原西鶴」は最も信頼できる資料とされる『見聞談叢』を中心に先行研究から西鶴の出自や経歴をまとめた。

第二章『日本永代蔵』では目録と副題の不一致が見受けられる十話を四つに分類分けして考察したが、全て中核となる話（主人公と思われる人物の話）がありながら、その中心的人物の話と対比させた副題を作ることで、中心の話の重要性をより深めたり、全体的に世の中の様子を語る世間咄としての意味合いを出す意図があるのではないかと感じた。つまり永代蔵の他の二十話の様に、目録・副題が示す人物が主人公と思われる人物であるという統一性をまとめるのではなく、主題をはっきり定めたものではない。明確な主題というよりも、対比そのものに焦点を当てた話という事が今回扱った十話の共通点であると考えられる。わざわざ他の人物を示す副題を並べることで、目録と副題自体にも対比が生まれ、中心の話の中身の重要性が深まる。しかし目録・副題の不整合性は、

その中心的人物の話は主題としてではなく、世間咄の様な話の中であくまで一部に過ぎないという作者の意図が感じられる。また、『日本永代蔵』全三十話の主人公を元手に重点を置いて考察した結果「元手のある主人公」の項目では、親からの財産を引き継いだ二代目が多数だということが分かった。元手がある状態から最終的に成功した主人公達は皆、自らの才覚や工夫で成功した者ばかりである。しかし、中には完全に強運に恵まれた成功者も一部登場しており、これは西鶴が「才覚に仕合手伝では成がたし」と語る様に、これもまた世の中の現実を物語った話だといえる。一方「元手のない主人公」の項目では、各主人公の元手の獲得方法を①神の福德、②人柄や運、③堅実さと儉約と分類して各話の考察を行った。続いて「その他の話」の考察では、元手のことを語る町人の話というよりは、町人としての教訓としての性格が他の二十話と比べて強いもの・主人公が豪商としての経験を持たない、または町人としての成功をしていないもの等が該当することが分かった。総合して考察した結果、『日本永代蔵』全三十話は、「元手のある主人公」が九話・「元手のない主人公」が十一話・「その他の話（教訓色の強い話）」が十話で、非常にバランス良くまとめられた作品であるといえる。

第三章『世間胸算用』での頻出単語を考察した。ここでは、一般的な意味以外でこの作品独自の意味で使われている場合のみを抜き出していくこととした。例えば『日本永代蔵』における「算用」という単語は「よくよく考えた上で金銀を使う」という始末儉約の色が濃い、『世間胸算用』においては「何とかやり過ごすために、頭の中で考えを巡らせる」という生活維持としての独自の意味がある。『日本永代蔵』での単語の用いられ方・意味と比較して考察を行った。分別・智恵・才覚・思案は町人なら誰でも必要だが、切羽詰った下級商人は豪商よりもよりそれに気を遣わなければならない。何故なら、そうしなければ生きていけないからだ。常に油断なく、胸算用をする。『日本永代蔵』で語られていた様な「教訓」ではなく、この作品ではもはや警戒・用心・辛抱といった様な、そんな張り詰めた雰囲気を感じさせる。

『日本永代蔵』が「致富道に至る教訓」に重きを置きながら町人の生活を描き出したのに対して、『世間胸算用』は下級商人を通して「世の中には様々な形で世渡りをする町人達が多くいる」という現実に重きを置いたのではないかとすることを分析した。

4. 今後の課題

仮名草子の『長者教』に対しての『日本永代蔵』の「新長者教」は、教訓を含みながらもあらゆる世の現実をも交えた上での金銀にまつわる作品なのだという意味もあるのではないかと考えた。つまり、『日本永代蔵』は致富のための方法や教訓だけを目的とした「長者教」的役割だけではなく、経済的な成功・失敗に関する話題を様々な角度から綴った雑話であり、経済の説話集としても定義できる作品だと考える。今後は従来語られてきた『日本永代蔵』成立論や、今回目録・副題で扱った十話以外の考察や作品の性格をより深く分析していく。『世間胸算用』の頻出単語も、他の「町人物」作品と比較してまとめたい。最終的に、「町人物」とは何かという点に深く切り込んでいくことを目標とし考察をしていく。また、『西鶴織留』等の遺稿集の考察も視野に入れて研究を進める所存である。

主要参考文献（著書、学術雑誌）

- [1]野間光辰(1960)『日本古典文学大系48 西鶴集下』岩波書店
- [2]長谷川強(1978)『図説日本の古典15 井原西鶴』集英社
- [3]麻生磯次,富士昭雄(1984)『決定版対訳西鶴全集12 日本永代蔵』明治書院
- [4]麻生磯次,富士昭雄(1993)『決定版対訳西鶴全集13 世間胸算用』明治書院
- [5]谷脇理史,西島孜哉編(1993)『西鶴を学ぶ人のために』世界思想社
- [6]前田金五郎(1995)『新注日本永代蔵』大修館書店
- [7]谷脇理史,暉峻康隆,神保五弥(1996)『新編日本古典文学全集68 井原西鶴集3』小学館
- [8]江本裕,谷脇理史編(1996)『西鶴事典』おうふう社
- [9]谷脇理史(2004)『西鶴を楽しむ② 経済小説の原点「日本永代蔵」』清文堂出版
- [10]広嶋進(2005)『西鶴を楽しむ④ 大晦日を笑う「世間胸算用」』清文堂出版
- [11]堀切実(2009)『新版 日本永代蔵』角川学芸出版
- [12]中嶋隆(2012)『西鶴に学ぶ一貧者の教訓・富者の知恵』創元社

特別支援学級における課題遂行を促す臨床心理学的介入 —三項関係の形成に注目して—

Clinical Psychological Intervention with Attention to Subject Execution in a Special Support Class:
Focusing on Formation of a Triadic Relationship

葉袋 真奈美

Manami Minai

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：特別支援学級，課題遂行，三項関係，コミュニケーション

Key words : special support classes, intervention, subject execution, triadic relationships, communication

1. 問題と目的

特別支援学級とは障害の比較的軽い子どものための少人数の学級であり，本研究ではその中で知的障害および情緒障害を対象とした1学級を対象とする。

課題遂行を目的とした介入について，佐々木(1993)は周囲で何が起きているのか，何をすればよいのか具体的に提示する構造化が有効であると述べている。霜田(2006)はそのような介入によってセルフ・マネージメント行動を獲得することで子どもたちは自律的な行動ができると報告している。本研究では特別支援学級での課題を学習課題だけでなく社会的なスキルなど日常生活の様々な課題として扱う。

コミュニケーションには言語的なコミュニケーションと，言語を媒介しない非言語的なコミュニケーションがあり，やりとりの中で重要な機能を果たしている。コミュニケーションが成立するためには以下の2側面が重要であると考えられる。1つ目は事前に適切な身構えを整える機能のフィードフォワード(feedforward)であり，もう1つは事後に適切な身構え直しを整える機能のフィードバック(feedback)である(深谷, 2000)。深谷(2000)は，人と人が関わりあって形成されていく交信活動の種類を3つに分類した。第1は互いの情緒が共振しあって自他の関係が一体化してゆく現象を強調したダイアログ(dialogue)である。第2は自己主張的に相手に告知してゆくノーティフィケーション(notification)である。その上で，発信者と受信者の立場を交互に交換しながら，相手の視点が自身へと再帰してくる交信活動を強調してコミュニケーション(communication)と呼んでいる。

課題遂行を促すためには，課題を第三項とした

教授者—第三項—対象生徒という三項関係の形成が重要であると考えられる。三項関係は二者が共に同一場面に並んで関心やイメージを共有し，二者が共に見つめている事象と話し手と受け手の三項によって形成される(やまだ, 1988)。三項関係について大澤(2004)は広汎性発達障害児と関わるときに人と関わるよりも，関わりやすく理解しやすい「物」との関係性を育てることから始めると述べている。物は取り扱い方が限定されていて，その範囲で関わればよいが，人と関わる時には関わり方が多様である。そのため，人と二項関係を形成することが苦手な自閉症児などには具体的に扱える物を媒介させ，三項関係を形成することで人との関わりを発生させることが有効であると考えられる。本研究では，この支援に基づき具体的に扱うことができる物を第三項として媒介させる為に，子どもがその場で何をすべきかというフィードフォワードが作れるように視覚的に明示したり，具体的に説明したりする方法をとる。本研究は三項関係の形成によって課題遂行を促し，最終的に生徒の自律的な課題遂行を目的とした教員や教育活動指導職員の介入の意義を検討する。

2. 方法

都内公立中学校特別支援学級に在籍する自閉症や軽度知的障害などの1~3年生徒14名(男子7名，女子6名)を対象に，筆者PAが教育活動指導職員としてクラスに入り，授業や休み時間などで観察を行った。筆者が記述した成り行きについて，三項関係の形成という視点から教員や教育活動指導員による介入の意義を検討する。

3. 結果と考察

生徒はS，教員にT，教育活動指導職員にPと個人を識別する記号で表記する。紙面の関係上，時系列的な変化が認められた3年女子SK(自閉症)

のうがい場面と人との関わりの2場面のみ取り上げる。

1, うがい場面について. 1-1 (Y年11月1日) でSKは授業開始のチャイムが鳴ってもうがいを終えることができなかった. PAが「10秒で終わりね」と言い, カウントダウンを始めるとSKはうがいを終えて教室に戻った. 1-2 (Y年11月29日) で授業が始まってもうがいをやめなかったSKにPAが「3回で終わりね」と言うと, SKはうがいを3回して教室に戻った. 1-3 (Y年12月6日) でSKは授業開始のチャイムが鳴ると一人でうがいを終えて教室に戻った. 1-1や1-2でSKが教室に戻ることができなかった条件として, うがいを終えるための明確な基準がなかったことが考えられる. PAが1-1で「10秒」, 1-2で「3回」という基準を与えた結果, PAとSKの間に基準を第三項とした三項関係が形成され, SKはうがいを終えて教室に戻ることができたと考えられる. 三項関係が形成された条件として, SKがチャイムの音とそれが教室に入る合図であることの知識を持っていたために, 教室に入って学習するというフィードフォワードが形成されていたことが考察された. 1-3で, SKが一人でうがいを終えて教室に戻ることができた条件として, PAが与えた基準がSKに内在化されつつあることが考えられる.

2, 人との関わりについて. 2-1 (Y年7月18日) でSKはSFが遊んでいたゲームをSBと共に見ていた. 他の二人はゲームに関する会話をしたが, SKは黙っていた. 2-2 (Y年10月11日) でSKが卒業アルバムについてPAに次々と質問し, PAは価格等を答えた. 2-3 (Y年11月29日) でSFがSKの取り組んでいた作品を見て, SKに質問したがSKは黙っていた. PAが「何作ってるか教えてあげて。」と言うと, SKはSFの質問に答えた. 2-4 (Y+1年1月10日) でSAの質問にSKが答え, 更にSAの会話に対する感想を述べた. SKがそっぽを向いて会話途切れそうになった時だけ, PAがSAの会話中に出てきたSKの好きなキャラクターについて「SKさんの好きな〇〇だって。」と言うと, SKは再び会話に参加し, SAに向かって「△△知ってる？」と自発的に質問した.

人と関わるには話題そのものを第三項としなければならないが, SKはそのレベルでの関わりができなかった. そこでPAはSKが具体的に扱える物を第三項とし, 次の段階では話題を第三項としてやりとりするためにPAが中継ぎ役として間に

入り, 再帰するコミュニケーションができるように介入を行った. 3-1でSKは会話に入れなかったため, ゲームが第三項として機能していなかったと考えられる. 3-2は卒業アルバムが具体的にイメージでき, 第三項としての意味が明確だったためにSKに会話を行うためのフィードフォワードが作られ, 三項関係が形成され, SKは続けて質問することができた. ここでのPAの答えがフィードフォワードを効かせるために機能したので再帰的な交信行動としてのコミュニケーションが成立したと考えられる. 3-1や3-2は物を, 3-3や3-4は人を対象としたやりとりのため, 関わり方の多様性のレベルが異なっていたと考えられる. 3-3ではSKとSFの間にPAが入り, SKが質問に答えるためのフィードフォワードが効くような考え方を示し, 中継ぎ役として機能したために話題を第三項として三項関係が形成されたと考えられる. 3-4では, SKに会話をするためにフィードフォワードが形成されていたためにPAが中継ぎ役としての介入をあまりしなくても会話を続けることができたと考えられる.

4. 結論

本研究では具体的に扱える物(うがいや卒業アルバムなど)を第三項として明示し, 三項関係を形成することで具体的なレベルでのフィードフォワードを作る場面を作って課題遂行を促す段階から始め, 次に教授者が中継ぎ役として機能することで話題を第三項として三項関係を形成させた. そして最終的に中継ぎ役が介入しなくても会話をするためのフィードフォワードが有効に機能して, 少しずつ再帰的なコミュニケーションが行えるようになったと考えられる.

引用文献

- [1] 深谷澄男(2000). 心理学を開く一障害との出会いと係わり合い― 北樹出版.
- [2] 大澤ちひろ(2004). 三項関係からみた広汎性発達障害児の療育 発達臨床研究. (22), 75-88.
- [3] 佐々木正美(1993). 自閉症療育ハンドブック―TEACCHプログラムに学ぶ― 学習研究社.
- [4] 霜田浩信(2006). 自閉症児に対する学習課題遂行のためのセルフ・マネジメント行動の指導 文教大学教育学部教育学部紀要, No.40, 67-74.
- [5] やまだようこ(1988). ことばの前のことば―ことばが生まれるすじみち― 新曜社.

幼稚園における特別な支援を必要とする子どもの仲間関係の形成と展開 — 一個人の事例分析を通して —

A Case Study of the Formation and Development of
Peer Relationships of a Child with Special Needs in Kindergarten

池田 久美子

Kumiko Ikeda

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 児童発達臨床学専修

キーワード：幼稚園，特別な支援を必要とする子ども，仲間関係，身体，事例研究

Key words : a child with special needs, peer relationships, kindergarten, body, case study

1. 研究目的

最近の保育学研究では、子どもはまわりの人々との関係の中で、多様な手段を使用して他の子どもとかかわりあい様々な体験をしながら関係性を形成していくこと、またその関係は一様なものではなく相手によって親密さに違いがあること、などが明らかになってきている。一方、特別な支援を必要とする子どもの仲間関係についての先行研究の多くは、集団参加を目的とした社会的認知能力の獲得の支援方法について検討しており、まわりの人々との関係を重視する立場で子ども同士の仲間関係を捉え検討した研究はまだ少なく、十分に明らかになっているとは言えない。

本研究では、まわりの人々との関係を重視する立場で、鯨岡(1997)の「身体」の考え方を鍵概念として、幼稚園における特別な支援を必要とする子どもの仲間関係を捉えることを試みる。鯨岡が言う「身体」とは、メルロ・ポンティの「わたしとは私の身体である」「身体こそがみずから示し、身体こそがみずから語る」という身体の捉え方に即した、「コミュニケーションの基底となる主体としてのからだ」という意味合いをもつ。鯨岡は、おのずから共振・共鳴してしまう身体の有様を原初的コミュニケーションの基底にあるものとして重視し、これに似た捉え方として、他者の身体と類似の身体的状態を共有する間身体性(メルロ・ポンティ)や、かかわり合う二者の身体を振動数の等しい音叉になぞらえて一方が鳴り響けば他方が共鳴して鳴り響く身体的共鳴現象(廣松, 1997)を指摘している。

また他の先行研究でも、0~2歳児の子ども同士の関係は、このような共振・共鳴する身体に支えられて始まり、展開していくことが近年明らかにされている(須永, 2006, 瀬野, 2010)。

以上のような鯨岡の論及び先行研究での知見をふまえると、特別な支援を必要とする子どもと他の子どもは、「身体」を通じて仲間関係を築いていくと考えられる。

よって、本研究では、幼稚園において特別な支援を必要とする子どもと他の子どもとのあいだにどのような仲間関係が、どのように形成され展開していくのかについて、相互行為を分析し「身体」の視点で考察することによって検討する。

2. 研究方法

研究課題の究明にあたり、本研究では、一人の子どもの縦断的観察をもとに分析および考察を行う、事例研究法を採用した。

【観察対象児】

公立幼稚園(2年保育)に在籍する、軽度の発達の遅れがある女兒(観察開始当初の生活年齢4歳7カ月)を対象児とした。

【観察期間と観察方法】

観察は、平成23年5月から平成24年10月中旬まで週1回、遊び中心の場面で、基本的に「消極的な参与」の立場で参与観察を行った。観察総日数は計51日であった。

本研究では「相互行為」を「子どもと子どもの『あいだ』になんらかの関係が生じていること」と定義し、「対象児が一方向的に他児に関心を向けたら、接近して同じ遊びの場にいたりする状態が見られた場面」、さらに「対象児を含めた二人以上の子どもの互いに影響を及ぼし合っている状態が見られた場面」に焦点を当てて観察を行い、フィールドノートに記録した。対象児が接触した相手や場所の移行によって区切られるひとまとめのやりとりを1つのエピソードとして記述した。その結果、231のエピソードを得た。

[分析の方法]

- (1) 先行研究を参考にして、相互行為を分類するための分析の枠組みを作成した。
- (2) 対象児と他の子どもとの相互行為を(1)の分析の枠組みに基づいて分類した。(図1)

月	観察回数	①一方方向的関係	②互行的関係	③密着的关系	④友好的関係	⑤対立的关系	⑥支援される関係	⑦支援する関係	⑧その他
4歳5~6月中旬	12	4 (33.3%)	2 (16.6%)	1 (8.3%)	0 (0%)	1 (8.3%)	3 (25.0%)	1 (8.3%)	0 (0%)
4歳6月上旬	14	1 (7.1%)	2 (14.2%)	2 (14.2%)	2 (14.2%)	2 (14.2%)	2 (14.2%)	0 (0%)	1 (7.1%)
4歳7月	22	6 (27.2%)	6 (27.2%)	2 (9.0%)	2 (9.0%)	2 (9.0%)	2 (9.0%)	0 (0%)	0 (0%)
4歳8月	15	3 (20.0%)	3 (20.0%)	1 (6.6%)	2 (13.3%)	2 (13.3%)	2 (13.3%)	0 (0%)	0 (0%)
4歳9月	15	2 (13.3%)	5 (33.3%)	1 (6.6%)	3 (20.0%)	2 (13.3%)	0 (0%)	2 (13.3%)	0 (0%)
4歳10月	21	1 (4.7%)	3 (14.2%)	1 (4.7%)	2 (9.5%)	8 (38.0%)	3 (14.2%)	0 (0%)	1 (4.7%)
4歳11月	16	0 (0%)	3 (18.7%)	1 (6.2%)	2 (12.5%)	1 (6.2%)	5 (31.2%)	0 (0%)	1 (6.2%)
4歳12月	16	1 (6.2%)	1 (6.2%)	0 (0%)	10 (62.5%)	3 (18.7%)	1 (6.2%)	0 (0%)	1 (6.2%)
4歳1月	15	1 (6.6%)	2 (13.3%)	0 (0%)	5 (33.3%)	3 (20.0%)	1 (6.6%)	0 (0%)	1 (6.6%)
5歳2月	11	0 (0%)	1 (9.0%)	0 (0%)	6 (54.5%)	2 (18.1%)	1 (9.0%)	0 (0%)	1 (9.0%)
5歳3月	25	2 (8.0%)	1 (4.0%)	2 (8.0%)	0 (0%)	5 (20.0%)	5 (20.0%)	1 (4.0%)	1 (4.0%)
5歳4月	28	0 (0%)	2 (7.1%)	1 (3.5%)	14 (50.0%)	6 (21.4%)	5 (17.8%)	0 (0%)	0 (0%)
5歳5月	11	1 (9.0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (27.2%)	2 (18.1%)	2 (18.1%)	0 (0%)	0 (0%)
5歳6月	12	0 (0%)	2 (16.6%)	0 (0%)	2 (16.6%)	2 (16.6%)	4 (33.3%)	0 (0%)	0 (0%)
5歳7月	11	1 (9.0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (18.1%)	2 (18.1%)	2 (18.1%)	0 (0%)	0 (0%)
5歳8月	21	5 (23.8%)	4 (19.0%)	0 (0%)	7 (33.3%)	4 (19.0%)	1 (4.7%)	0 (0%)	0 (0%)

図1 相互行為の分類表

- (3) 相互行為のエピソードから、対象児と他の子どもはどのようにかわり、そのかわりの中で具体的に何が経験されていたかを、相互行為が生じた文脈の中で読み取った。(図2)

数名の子どもと手をつなぐことを求める (密着的关系)

エピソード1ー①
5月18日 <手をとってあいさつ> (No.2)
①くるみが登園するのが見えると、ありさは保育室を横切り階段のあるテラスに出て行って、くるみの手をそっと自分の手にとり、くるみを正面から見つめる。②担任保育者が「ありさちゃん、くるみちゃんおはようって」と言葉を添え、くるみはにっこりして「おはよ」とありさにあいさつする。ありさは微笑して手を放し、くるりと向きを変えて保育室に帰っていく。

ありさは言葉を発していないが、相手の手を取り、相手を見つめる動きによって、身体全体で「あなたに会えてうれしい」というようなメッセージを発していたようであった(①)。この気持ちを、担任保育者やくるみが受け止めてくれたことで、ありさは満足そうにする(②)。

図2 エピソードの読み取りによる分析例

3. 研究の結果

次のような結論を得た。

- (1) 特別な支援を必要とする子どもと他の子どものあいだでは、身体が共振したり、真似し合ったりすることがきっかけとなり、友好的な関係が生起していく。
- (2) 特別な支援を必要とする子どもと他の子どもは、モノ・保育者・動きやことばのパターンなどを支えにして体験を共有していく中で、互いをわかり合い、自分たちなりのやりとりの仕方を創り

出していく。

(3) 特別な支援を必要とする子どもと友好的な関係を築いた他の子どもは、自分たちなりのやり方で親しい関係であることを確認し合い、親しい関係を維持しながら、関係を深めていく。さらに、特別な支援を必要とする子どもと特定の子どもは、互いの志向が交叉し二者が一体となったより深い仲間関係を築く。

(4) 特別な支援を必要とする子どもと深い仲間関係を築いた特定の子どもは、やがてその関係を外部に開かれたものに変容させ、各々が他者へと関係を広げていく。

これまでの先行研究では、特別な支援を必要とする子どもは、集団に入って遊びに参加する力、遊び方や他者の心を理解する力、などを先に身につけることで、幼稚園で他の子どもと仲間関係を形成することができるようになってきた。しかし、本研究からは、特別な支援を必要とする子どもと他の子どもは、日々をともに過ごす中で、子どもたちを取り囲む園文化の共有やともに過ごしている時間の積み重ねを支えとし、ヒトとして共通にもっている「身体」を基盤にしてかわり合いわかり合いながら、友好的な仲間関係の一つの有り様を創り出していくことができるということが、明らかになった。

4. 今後の課題

特別な支援を必要とする子どもの仲間関係の形成と展開過程における保育者の役割について明らかにすることを、今後の課題としたい。

主要参考文献

- [1] 鯨岡峻 (1997) 原初的コミュニケーションの諸相, ミネルヴァ書房。
- [2] メルロ・ポンティ (1966) 眼と精神 (滝浦静雄・木田元, 訳), みすず書房。
- [3] 廣松渉 (1997) 共同主観性の現象学, 廣松渉著作集第6巻, 岩波書店, 405-530。
- [4] 須永美紀 (2006) 乳幼児同士のかかわりの変容に見る「協働」へのプロセス, 青山学院大学教育学会紀要, 50, 137-150。
- [5] 瀬野由衣 (2010) 2~3歳児は仲間同士の遊びでいかに共有テーマを生み出すか-相互模倣とその変化に着目した継続的観察-, 保育学研究, 48-2, 157-168。

レイプという「性犯罪」をめぐる言説の多様性についての研究

大和田 未来

Miki Ohwada

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 臨床社会学専修

キーワード：性犯罪，判例，質的研究，「モデル被害者」，レイプ

1. 研究目的

2012年9月、東京地裁でオリンピック柔道金メダリストの内柴正人の初公判が行われた。準強姦事件である。検察側は懲役5年を求刑、被告人は「合意の上で行為に及んだ」と無罪を主張している。内柴が起こしたとされているこの準強姦事件について、マスメディア等で大きく報道されていたのは記憶に新しい（論文提出後の2月1日には、検察側の求刑どおりの懲役5年という判決がでていた）。

この事件は、「夜道で見知らぬ変質者から襲われる」タイプの性犯罪ではない。「事件が深夜や飲酒中に起きた場合なども、被害に対する認識や判断が変わることがある」（野坂2009：207）という指摘が先行研究にはある。

裁判官のもつ「経験則，倫理則」，また，裁判員がもつ「性犯罪被害者」イメージ，警察で被害届を受理する／しないの判断となるような，「被害者として認定」されるための「被害者イメージ」についてなどを明らかにする必要があるといえる。

2. 先行研究について

性犯罪被害者の女性についてどのような「被害者イメージ」を構築してきているのかという先行研究においては，判決文を使い性犯罪被害者の「落ち度」をどのように規定しているかに焦点があてられてきている。

たとえば小宮（2011）においては，「被害者の当日の行動は「慎重に行動していた」と注釈可能な行動の集合の要素から，まったく反対に，「軽率な行動」とでも注釈可能な行動の集合の要素として理解できるように「パッケージ」（Jefferson1985）しなおされることになる」（小宮2011：237-8）というように，「貞操観念」のような「古い」と言われる考えが，「性的自由」を理解する実践の内部で，被害者の当日の行動の記述

をとおして，働いているということをはっきりと示している。

このような，女性に「貞操」を強いるような判決文について取り上げ，批判している先行研究が多い中，福島（1997）は「女性が，いわゆる水商売をしている女性であること，離婚をして二人の子どもをかかえ，しかも新しい男性と結婚届を出さないで共同生活を送り，現在，妊娠五カ月であること…一般的にマイナスと思える事項があるにもかかわらず，強姦罪を認定している」（福島1997：256）というように職業・経歴による差別についてコメントを残しており，この事例のみが先行研究から「浮いている」。

事実認定の過程を確認するためには地裁の判決文を丁寧に追っていくことが必要なことは先行研究からも明らかである。

しかし，なぜそのような裁判官の「気まぐれ」というような事態が発生しているのかという問いを立てた際に，性犯罪被害者の研究において明らかになっていないこととはどのようなことであろうか。

3. 研究対象と分析の視角

先行研究で扱われていたのは地裁の判決文である。なぜそのような多様な（一見すると矛盾する）言説が地裁の判決文において発生しているのかということについて，本研究では，もう一度裁判の性質にもどり考えることとする。

条文とともにルールを作成しているのは，最高裁判所の判決文であるという点に着目し，本研究ではルールを作る元となる判決文を対象とする。

本研究では，上野千鶴子の「モデル被害者」概念を用い，裁判所の判決文を質的データと位置付け，先行研究で明らかにされていない，最高裁判所における性犯罪の「モデル被害者」つまり，「モ

「レイプ被害者」がどのように構築されているかを明らかにする。

4. 強姦罪と強姦致傷罪の分水嶺

刑法より、十三歳未満は無条件で「レイプ被害者」像を構築する要素にはなりえるが、十三歳未満であっても「モデル」となるか否かについて、被害者が「貞操の価値を認め」ているかどうかといった視点が存在していた。

つまり、「モデルレイプ被害者」と認定されるには「貞操」を守る必要がある、という規範が条文の解釈の際に存在していることが明らかになる。

暴行・脅迫に関しても、相手の経歴や年齢によっては、被害者の抗拒を不能または困難にさせる場合がある、というように、被害者対被告人である加害者の関係性によって、暴行・脅迫の程度の線引きが変わるということもあわせて明らかになっている。

5. 「全力で貞操を守る」ことの認定

被害者がなくなっている場合において、事件を形容する言説として、「家族」「家庭」というものが存在する。しかし、被害者のいた家庭が平和な家庭であるかどうかは、被害者がレイプの被害にあうことと関係がない。

殺害に付随する言説として、抵抗した結果殺害されるという言説の存在もあり、「突然レイプにあった被害者」対「極悪人」である加害者の構図が存在し、「モデルレイプ被害者」像を構築する要素に加害者が「極悪人」であったという、被害者側の要因ではない要素が存在することが明らかになったといえる。

対象判例から、どの程度抵抗したかについての言及は、「死ぬまで抵抗した」ということである。死ぬまで抵抗を続ければ、「モデルレイプ被害者」と認められるといえる。

さらに、先行研究で問題となっていた女性側の「落ち度」であるが、「全く落ち度のない」被害者という記述が多かった。

被害者が亡くなった事例において、落ち度に関しては被害者側には「ない」ということである。

遡及的に「モデルレイプ被害者」像を構築しているのは、現在の最新判例からはレイプ・サバイバーである。

ここでは、女性側の証言の信用性が争点になっている。

有罪であれば判決文中に、無罪であれば判決文の補足意見として、女性の「属性」と、証言の信

用性についての記述がなされていた。

6. 研究の結果

性犯罪に関する裁判を行う法廷は性犯罪における「モデル被害者」と「モデル加害者」を構築する小さな「カテゴリーの政治性をめぐる言説の闘争の場」となっていたこと—必ずしも被害者の「落ち度」だけが重視されているわけではなく、被害者の「落ち度」は加害者が社会的地位やそれにふさわしい態度をとったかどうかと対になって判断される—についても同時に明らかになったといえる。

つまり、「被害者認定」における関与者カテゴリーをめぐる政治性の存在があるということが本研究から明らかになったといえる。

7. まとめと今後の課題

「モデルレイプ被害者」像を構築する要素の中に、被告人についての記述が存在することが本研究で明らかになった。

犯罪社会学においても従来の研究は「被害者」と「加害者」を分離してみてきたため、両者をふまえつつ統合してきている視点は少ないといえる。

本研究は法システム上の同一事件の加害者と被害者を同時に論じ、加害者と被害者の構造的位置づけを明らかにできたという点、また、それらのことを、裁判の判断基準として使用される判例において明らかにできたことに意義があるといえる。

本研究で明らかになった視点から地裁の判決文を読み直すことを一つの今後の課題としたい。

また、本研究全体をとおして強姦罪が「自由」に対する罪であるのかという問いをたてることができる。性犯罪とは純粋に「被害者」が望まない「加害者」からの性的な侵襲であり、強姦罪を「身体」に対する罪に分類することは不可能なことなのだろうか、ということである。被害の「傷」をはかる度合いの指標とされると想定されるPTSD概念について裁判で使用する際の問題点も含め、これらについてあわせて考察していくことをもう一つの今後の課題としていきたい。

主要参考文献（著書、学術雑誌）

福島瑞穂（1997）『裁判の女性学—女性の裁かれかた』有斐閣選書

小宮友根（2011）『実践の中のジェンダー—法システムの社会的記述』新曜社

上野千鶴子（1998）『ナショナリズムとジェンダー』青土社

心理面接の進展プロセス —セラピストの変化促進的介入に着目して—

The Progressive Process of Psychotherapy:
Attention to a Therapist's Intervention Promoting Change

森山 結

Yui Moriyama

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：心理面接，変化促進的介入，直面化

Key words：psychotherapy, intervention promoting change, confrontation

1. 研究目的

1976年にParloffは、心理療法の市場には130を超える療法が出回り“ジャングル状態”になっていると指摘した。しかし、自然消滅しかけているシステムを除いた上でいうと、多種多様な心理療法システムにおける、面接の初期に行うべきこと（面接の環境設定や環境整備，アセスメントなど）については、共通または類似した考え方が見られるといえるのではないだろうか。近年では「作業同盟」が注目されてきており、概念は理論家によって多少の違いがあるが、クライアント（以下CI）とセラピスト（以下Th）の感情的つながり・絆，面接中に行う作業とその目標に関する合意，CIの積極的関わりはどの理論にも共通する（Horvath&Greenberg, 1994）。

他方，Th-CI間の関係が形成され“面接が進行し，新たな局面を迎える”ということについて考える時，そこには学派によって異なった考え方がみられる。小此木（1983）は，Rangsの直面化（confrontation）を挙げ，フロイト的治療態度と技をつなげた上で，「真実をいうことと直面化＝現実検討することをためらわないことが必要である」と述べている。また河合（1986）は，CIが受容体験によって自己受容の状態に至った後に，自己対決の位相に移行するためには“自分自身に矛盾がないか，今のままでよいか”と問われていると感じる対決体験をすることが必要であるとした。

そこで本研究では，「直面化」や「対決」が，その度合いは違うものの，CIに自らと向き合うことを促進させ，面接の進展を図るという共通因子をもつとし，このようなThの積極的な介入を「変化促進的介入」と位置づけた。また，行動療法における治療者の課題提示や取り組みへの励まし，

結果の評価なども，行動の変化や不安低下に効果をもたらすと考え「変化促進的介入」に含めた。さらに，足立ら（2011）や糟谷ら（2011）の研究において，促進的作用が示唆されたThによる「肯定的介入」も加え，本研究では「ThがCIの変化の促進を目的として行う介入」として，理論モデルの枠を超えて，統合的心理療法の視点から「変化促進的介入」が行われるプロセスの実際や可能性，意義について，臨床データをもとに検討を行った。

2. 研究方法

対象者は現在心理面接を行っているCIと，そのThとし（表1参照），「Interpersonal Process Recall」（Kagan, 1980）を用いてそれぞれにインタビュー調査を行い，Thには併せて記述調査を行った。その後イベント・パラダイムといわれる考え方に基づき分析を行い，Thの変化促進的介入分類名については，研究協力者（指導担当教授・院生2名）と共に，KJ法的に検討を重ね概念生成を行った。

表1. 対象者の詳細とケース概要

CIの年齢 性別	主訴・問題	面接構造	Thの年齢別 臨床経験	セラピーの 帰結	分析に使用した セッション
ケースA 30代前半・女性	情緒不安定 自己愛パーソナリティ障害 <境界例水準>	月1回 対面法	50代男性 (25年)	継続中 (終結間際) ~#49	#3, #15, #33, #42
ケースB 30代後半・女性	情緒不安定 夫婦関係 <ノーマル水準>	月2回 対面法	50代男性 (25年)	継続中 ~#38	#5, #19, #27
ケースC 20代後半・女性	摂食障害 <境界例水準>	週1回 対面法	20代女性 (6年)	継続中~ #121	#83, #87, #88

3. 結果と考察

変化促進的介入の分類名と介入の内容について表に記す（表2参照）。

表2. 変化促進的介入についての分類表

介入分類	意味
①直面化	CIがなんとなく避けていた事実に対して目を向け、焦点を合わすように促すこと
②here and nowの解釈	セラピー場面(Th-CI間)における「いまここで」について、共感を含んだ理解を伝える作業
③明確化	CIの中の不明確な点を事実結び付けて、ある状況を浮き彫りにすること
④方向性の提示	CIの方向性について提示すること
⑤間接的提案	CIのテーマについて間接的な事象を用いて提案すること
⑥具体例の提示	具体例を提示すること
⑦心理教育	CIの抱える問題や症状について、心理学的に実証されている理論や、仮説やデータなどを伝えていくこと
⑧探索的問いかけ	CIに探索を促すための問いかけを行うこと
⑨感情の開示の促進	CIが感じていることを開示するように促すこと
⑩課題の提示	ThがCIにとって必要であると見立てた課題を提示すること
⑪目標の提示	Thが見立てを基に必要であると考えているCIの目標を提示すること
⑫肯定	そのとおりであると同意すること、積極的に認めること
⑬後押し肯定	CIにとっての後押しとなるように、CIの価値を認めたり、正当に評価すること
⑭先取り肯定	CIの理想的な未来をThが先取って提示すること
⑮変化の肯定	CIに生じたわずかな変化を捉えて、認めたり褒めたりすること
⑯共感的理解の提示	CIの内的状態を感じ取り、さらにThが自分の中に生じたその体験を吟味し、把握して伝えること

まず、Thの変化促進的介入のCIに対する効果について検討を行った結果、病態水準による違いがみられた。境界例水準の2ケースでは、セラピー初期において、Thへの信頼感の乏しさが変化促進的介入の効果を阻害していたことが示唆された。しかし、セッション数が積み重なるにつれ、Thとの基本的信頼関係が構築されていったために、変化促進的介入がThの意図を反映した形で効果を示していた。他方、ノーマル水準ケースでは、セラピー初期の頃から安定した信頼関係が形成されており、変化促進的介入が効果的に働いていたことが明らかとなった。以上のことから、変化促進的介入が効果的に機能するためには、Th-CI間に安心感を伴った基本的信頼感が基盤として存在する重要性が示された。

4. まとめ

Thの変化促進的介入を受けたCIがどのように変容に導かれるのかについて検討を行った。その結果、Thが変化促進的介入を行うと、CIはそのつど「CI自身について」「これまでのセラピーについて」「Thについて」「吟味」をしていることが明らかとなった。この、吟味することこそが「内

省・洞察」であり、この吟味によってThの介入内容を受け入れられるか否かの判断がなされ、直接的効果が見られない場合と、認知変容へと導かれる場合とに分かれると考えられた(図1参照)。

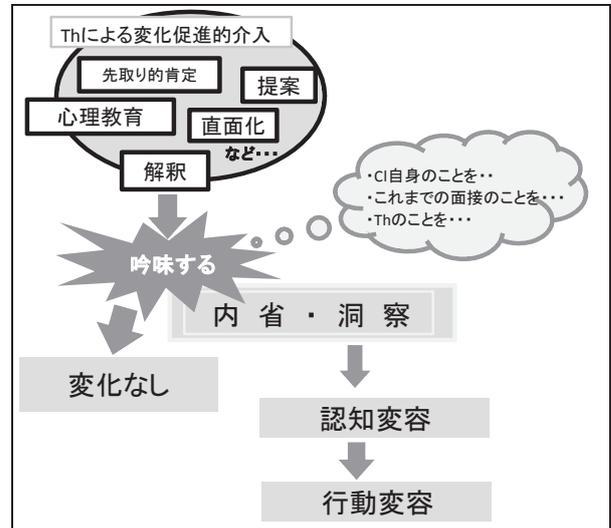


図1. Thの変化促進的介入を受けたCIの変容プロセス

5. 今後の課題

まず、セラピーのデータの抽出について、ケースごとにばらつきがあったことが挙げられる。各ケース内においても、初期・中期・終期を均等に抽出できなかった。これらを均等に抽出し、比較検討することで、Th-CI間の信頼関係の構築の過程も明らかにできるといえる。また、本研究ではCIにセラピー当時を振り返ってもらう形でインタビューを行ったが、抽出したセッションから時間が長く経過していた場合が多かった。そのため、よりセラピー場面の感情体験を想起してもらいやすいように、セラピーへの影響は十分に考慮した上で、セッションから時間経過があまりない状態でのインタビュー調査を行うことが望ましいと考えられる。

主要参考文献(著書, 学術雑誌)

[1]James O. Prochaska and John C. Norcross. (2007) *System of Psychotherapy A Transtheoretical Analysis Six Edition*. Brooks : Cengage Learning Company. (ジェームズ O. プロチャスカ・ジョン C. ノークロス 津田 彰・山崎久美子(監訳) (2010). 心理療法の諸システム——多理論的統合的分析 [第6版] 金子書房) pp.51-52.)

保育所における保護者支援についての検討 —「クラスだより」の分析を通して—

A Study on Child Care Support to Parents at a Daycare Center:
Analysis of a Daily Class Reports

会森 恵美

Emi Emori

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 児童発達臨床学専修

キーワード：保育所，保護者支援，クラスだより，子育て支援

Key words : daycare centers, child care support to parents, daily class reports

1. 研究目的

筆者は保育士として働いていた頃、「“上から下ろされて”くる」¹「子育て支援」事業を引き受けていたが、何か違うのではないかとぼんやりとした疑問を感じていた。保育の現場を離れた現在、保育の場で保育者が子育てを支えるとはどういうことかを改めて検討したいと考え、保育の現場で行われる「子育て支援」のうち、子どもが保育所に入所する保護者を対象とした「保護者支援」に焦点を当て、保育との関係を検討することにした。しかし保育そのものを「保護者支援」の観点から分析していくことは難しく、筆者が日常的に発行していた「クラスだより」と「保護者支援」の関係について考察していくことにした。

本論文では筆者が保育者として「クラスだより」を発行していた当時を振り返りながら、「クラスだより」で保護者に何を伝えたかったのか、それは「保護者支援」の役割を果たしていたのかに焦点を当てて分析考察を進める。そして「クラスだより」の意義を明らかにし、保育現場における「保護者支援」とは何をすることなのかについて検討していく。

2. 本研究における用語の整理

(1) 「子育て支援」及び「保護者支援」 保育所に入所する子どもの保護者に対する子育ての支援を「保護者支援」と呼ぶが、地域の在宅子育て家庭に対する「子育て支援」と子どもが保育所に入所する保護者に対する「保護者支援」を分けて明記したのは平成20年版の保育所保育指針である。したがって本研究では「保護者支援」に焦点をあてるが、平成20年以前の先行研究等の検討については「子育て支援」という言葉を用いる。

(2) 本研究における「保護者支援」とは 「親を子育ての主体者として位置づけ、保育者が日常

の保育を通して親が安心して子育てをしながら親として成長することを支え、同時にこどもの健やかな成長を促すこと」と定義する。

3. 研究の対象と方法

(1) 研究の対象

- ・「くじらだより」 公立保育所年長クラスで筆者らが平成X年度に発行したクラスだより185日分。
- ・連絡帳 当該クラスの在園児Mの保護者と担任のやり取りが記された1年分の連絡帳4冊。

(2) 研究の方法

「くじらだより」は1年をⅠ期4～5月，Ⅱ期6～8月，Ⅲ期9～12月，Ⅳ期1～3月の4期に分け、それぞれの期で“保育者は保護者に何を伝えたかったのか”という点に焦点を当ててKJ法を使って分析した。連絡帳は「くじらだより」に保護者が応答的にコメントを書いた部分を中心に時系列で整理した。そして「くじらだより」の分析からわかったことと保護者のコメントを対照させ、「くじらだより」が保護者に伝えたことは何か、それが「保護者支援」としてどのような役割を果たしていたのかを考察し、クラスだよりの意義を検討した。その上で保育所における「保護者支援」について考察する。

4. 分析の結果と考察

(1) KJ法によって作成されたラベルの量的分析

「くじらだより」の発行時期と枚数を比べてみると、Ⅳ期は保護者が保管していなかった「くじらだより」は2日分のみであり、他期に比べて際立って少ない。これは「くじらだより」を読み続けた保護者が、子どもたちの姿や保育者への共感を強くしていったことを示すと考えられる。

(2) KJ法による図の作成とラベルに基づく「くじらだより」のメッセージ分析

KJ法によるラベルの空間配置とラベルをまと

めた表により、各期の特徴を考察した。

(3) メッセージ分析による期の特徴のまとめ

①多く書かれている項目について I期, III期, IV期に最も多く書かれた項目は、「子どもが園でどのように過ごしているか知ってほしい」である。II期は、「子どもが持っている楽しさを伝えたい」項目が多く、子どもたちの姿をプラスの感情を表す言葉を付して記述している。このことはI期からII期にかけて保育者と子どもたちの関係が緊張感を含むものから安心・信頼感を含むものに変わってきたことを示唆しているといえる。

②成長している姿の記述について I期は成長をわかりやすい姿で伝えることが多く、II期は子どもたちの内面的な成長を記している。またI期とIII期IV期の“成長”の質には違いがみられた。そして成長したのは子どもだけでなく、保育者と子どもの関係性そのものが成長していった、と捉えることができた。

③保育者が手を焼く場面の記述について I期では保育者が手を焼く場面が時にはユーモアを交えて書かれ、III期ではケンカ等の場面がそのまま書かれている。このことは保護者と保育者の関係も成長していったことを示唆している。

(4) 連絡帳との関連における考察

連絡帳と「くじらだより」を対照しながら考察したことをまとめると次のようになる。

①保護者との信頼関係を築きたいという保育者の意図は伝わっている、と考えてよいのではないか。

②保護者は「くじらだより」を通して、「集団の中で我が子を見るまなざし」と「我が子以外の子どもたちを見るまなざし」という二つの視点を持つようになった、といえる。

③「くじらだより」の記述に対し、保護者が共感的なコメントを書いていた。このことは、保護者は「保育者と同じまなざし」を持つようになっていた、といえる。

5. 総合考察

(1) 「保護者支援」としての「くじらだより」の意義

「くじらだより」を本研究における「保護者支援」の定義の視点で考察した。保育者の目を通して子どもたちの姿を知らせることは、保護者と保育者の信頼関係を築くことになり、保護者は安心して保育所に子どもを通わせることができる。さらに、親としての成長のひとつである子どもを見るまなざしが豊かになることを助けていた。よって、「く

じらだより」は「保護者支援」としての機能を果たしていた、といえる。

(2) クラスだよりの意義

「くじらだより」にはこどもの成長の姿、保育者の意図や気持ちなど、様々な内容が記載されており、これは、行事などの前にだけ発行されるクラスだよりでは掲載し切れない内容といえる。つまり、日々の保育の場面が保育者の目を通して記述されていたということが、「保護者支援」としてのクラスだよりの重要な点であるといえる。

(3) 保育所における「保護者支援」についての検討

大場は、子どもや保護者が保育者を信頼することだけでも「子育て支援」になると述べている。保育所における「保護者支援」は、保育者が、子どもや保護者と信頼関係を築いていく保育そのものを大切にしていくことも大事な課題であるといえることができる。

6. 結論

「くじらだより」は、保育の中で生起する子どもたちの様々な姿を保育者の目を通して伝え、保護者はそのメッセージを受け止めて、保育者と共に喜んだり残念がったりして思いを共有していた。それらのことは、「保護者支援」の目的の一つである“親としての成長”に必要な“子どもを見るまなざし”を重層的にしていくともいえた。また、子どもや保護者が保育者を信頼するという保育そのものが「子育て支援」になるともいえる。したがって保育所における「保護者支援」は、日常的な保育そのものを大切にしていくことが大事な課題であり、子どもたちの様々な姿や保育者の思いなどを保育の中での姿を通して伝えることで、親としての成長を助けていくことが重要となる。そのツールとして日常の子どもたちの姿や保育者の思いを伝えるクラスだよりは有効である、といえることができた。

7. 今後の課題

保護者が「くじらだより」を読んでどのように考えていたかについて今回は連絡帳の分析から考察したが、インタビューを含めた詳細な追跡調査が今後必要である。

引用文献

1. 大場幸夫 (2002) 「子育て支援」における保育者の主導権 (ヘゲモニー) を問う。保育の実践と研究. 16. (4). 25